2010年9月号　　　第2期第100号記念号（第2分冊）

翻 訳 通 信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目　次

翻訳通信　〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一　電子メール　GFC01200@nifty.ne.jp
（@は半角文字に変えてください）
定期購読の申し込みと解除　http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html
知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。
『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。
バックナンバー　http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html

翻訳の営業

(0) 前説

大した収入にならないのが分かっていても、翻訳を志す人は多い。そういう人たちの役に立とうと、ささやかながら傾向と対策を教えたり、仕事を紹介したりしてきた。

以前、志望者を選抜のうえ、ⅠからⅣまでのランクに分け、実践で鍛えたことがある。十数年経ってみて、現在活躍している人とそうでない人の当時のランク付けが必ずしも一致していないことに気付いた。それどころか、実力なく途中でお引取り願った人や、さらには最初から駄目だと落とした人でも、今その訳書が目に触れることがある。

自分の見る目がなかった、のだろうか。仲代達矢だとて上川隆也（「大地の子」で脚光）をその私塾「無名塾」の入門試験で落としたのだから、才能を見抜くのは至難の業なのかもしれない。

とはいえ、私の教室で過去親しく教えた延べ 14 年間 150 人のうち、少なくとも 40 人以上が自分の名前で訳書を出しているのだから、大筋まちがった選択ではなかったはずだ。

では、低ランクの翻訳志望者または不合格者で、現在世に出ている出版翻訳者はどのようにして関門をくぐり抜けたのだろうか。「努力とか忍耐」といった面での分析は別の機会に譲るとして、私が大きく感じるのは、そうした人たちは広い意味での「営業の才」があったのだろうということだ。営業方法にはいろいろあって、個々人によって違わざるをえず、逐一例を挙げればきりがない。

そこで視点を変え、翻訳会社の営業実録を公開するので、個々人の翻訳営業のよすがとしていただきたい。ちなみに、私が最近まで代表を務めていた㈱アイディは翻訳会社としては老舗であり、2、3 人の所帯から最大時は契約者も含め 50 名、自社ビルと分不相応な別荘を有し、手広くやっていた（過去形、トホッ）。その営業は、かなりの部分、代表である私自身が推進したのだが、営業は頭か体か時間（またはその全部）を使うもの---しかもプライドと誠意を失わずに---であることが、読んでもらえれば理解いただけると思う。

では、以下具体例を…

(1) 営業とは何か

何年か前、流行らない飲食店を繁盛店に変身させる、テレビ東京の人気番組『貧乏脱出大作戦』が好きで、いつも見ていた。

ある回で、腕は立つのに一向に客に恵まれない食堂の店主が、料理達人に弟子入りし、その腕前を披露した。達人が思わずつぶやく「腕はいいじゃないか」。貧乏店主、誇らしげに答えていわく「うまいものを作っていれば、お客は必ず来てくれると思います」。達人、いったん、そうだなと頷いたが、まてよと一言。「今は（昔とちがって）うまいものを出すのは当たり前だ。どうやってお客を引っ張ってくるかが、問題だ」。

確かに。昔はまずい店ばかりで、うまいものを食わせる店があれば、みんな労を惜しまず出掛けていったはずだ。いまではどの店もそこそこ旨い。となると、まず自分の店をどう潜在顧客に認知させるかが、重要なのだ。

これは、あらゆるサービス業にあてはまる真理だと思う。かつて私は、ラジオ・ドラマの主役を演じ、名子役といわれた（「中央公論」）ことがあるが、あの程度の演技をできる子どもは、今ならいくらでもいよう。翻訳業界に目を転じてみれば、高等教育の普及に伴い、翻訳が高度の専門技術であった時代は過ぎ、そこそこのものなら「どの社」「どの訳者」でもこなせる時代になったのである。

まずこの店が味はよく、くつろげる店であることを、知らせねばならない。この活動が広義の営業といえる。そう、翻訳でいえば、<u>当社の存在を潜在顧客に知らしめ、発注に至らしめる</u>こと、なのである。

(2) 顧客の発掘　その 1

では営業にはどんな手法があるのだろう。

①飛び込み

<u>度胸をつけるにはよい</u>が、やたらにやっても効果はない。一流のビルの、需要がありそうな会社の、需要がありそうな部門の、親切そうな窓口の人に、用件を手短にいって、当該部門の人を紹介してもらう。少なくともどの部門の、出来れば誰が担当か、情報をもらう。うるさくない程度に食い下がること。

②DM はがき

とにかく数を出すこと、ターゲットは広くとること。返信者には特典をつけたり、さらに当該部門情報提供につきグッズ贈呈など、返信が来やすいよう

工夫する。百や千の単位では効果がない。万の単位で計画的に出す。返信があれば、すぐ反応すること。社業の空いた時間を見つけ、こまめに書くこと。でないと、書くことが目的化し、書くだけで仕事をやっているような悪しき満足感にひたってしまうことになる。

③インターネット
翻訳をはじめて依頼しようという顧客は、まずインターネットで業者をあたろうとすることが多いだろう。多少の費用を掛けても、当社にアクセスしてくれやすい環境を整備しなければならない。そのうえで、アクセスした潜在顧客が、興味を持ってくれるような画面づくりが必要。ビジュアルを増やす、社の実績、社長の信用、発注者への特典（グッズ、小冊子、無料添削など）、イメージと信頼感、お得感を前面に出してゆかねばならない。

④紹介
日常、よい仕事をすることが最大の営業ではある。ご紹介いただくことは、担当者にも、社自体にも名誉なことである。紹介者に感謝し、お礼とささやかなノベルティを欠かさないこととしたい。また旧・現顧客に特典つきの紹介依頼状を出すことも、検討に値する。

⑤休眠客掘起し
不精してはだめ。かならず電話で攻める、それも件数をまとめて一気にやる。仕事がないのか、値段が高いのか、質がわるいのか、それとも別の要因なのか、必ず確かめる。だめであっても、礼状を添えた当社パンフレットを送っておく。確率は低くとも、いつ、なにがあるか分からないのである。営業とは地味で、成果まで時間のかかるものなのだ。

(2)顧客の発掘　その2

⑥展示会資料
ずっと以前、展示会をこまめに回るのだが、「おもしろかった」「つまらなかった」と感想を述べるだけで、何のために展示会回りをするのかわかっていない、とっちゃん坊やのような社員がいたが、それでは困る。営業のための貴重な情報を集めにゆくのである。翻訳需要がありそうな展示会か、そのなかでどの社のどの部門がさらに出そうか、現場で感覚をチェックし、戻ってから可能性の値踏みをする。ベテランであれば、カンの働くままにターゲットをしぼってもよいが、新人の場合はともかく端から端までやってみるつもりで、資料に基づいて電話する。展示会の担当はたいてい広報や営業部門の人だから、結構こちらの知りたいこと（翻訳の有無と担当セクション）を教えてくれるはずだ。たまにじゃけんにされても、気にしないで、すぐ気分を変えること。

⑦新聞・雑誌記事を見て tel
日頃から、そう自分の自由な時間においても、翻訳周辺の出来事には関心を持っているべきだ。「公私を分けているので、仕事時間以外は一切翻訳のことは考えないようにしている」という社員がいるとしたら、本人にも会社にも不幸なことだ。公私でもってさっぱり切れるような仕事をしていて、本人は満足なのだろうか。
外国雑誌の日本版が出るという記事を見たら、これウチで翻訳やれたら面白そうだ、とか、外資と日本企業の大型合弁の話が出ていたら、翻訳業務ででっかいヤマが当てられそうかも知れない、と血がうずく程度にはこの業界が好きでなければ、ずっとやってはいけまい（どの業界でもこうした興味の持ち方は必須である）。朝一番に来て、さっさと新聞に目を通し（だらだら読むのは家でやること）、始業と同時に該当記事の出所に電話する、これが社会の第一線にかかわっている醍醐味だと思うが如何だろう。

⑧調査を装う
情報ソースの如何にかかわらず、狙いを定めた会社の当該セクションに迫るやり方の一つとして、営業っぽくなく近づく方法がある。多少ウソも方便に近くなるが、例えばコンピュータ会社に対してであれば、マニュアル製作の苦心所を「取材」させてもらう、ということで近づく。「出版社より編集を請け負っていて、そのあたりの取材」というわけである。人は、営業には身構えるものだが、自分のことを聞いてくれるとなると、脇が甘くなるものなのである。方便にはいろいろあろうから、各自工夫してやってみてほしい。本当に興味深い話が得られたら、そのとき出版社に、企画を持ち込めばよいのである。

(3)モデル営業活動

営業の基本は、見知らぬ人への売り込みである。もちろん自社商品を売り込むわけだが、それには自分自身を売り込む必要がある。自信がなかったり、妙に自信をもったり、はダメ、まず
①商品知識---自社商品を熟知すること
②信用を売る---魅力ある自分になること
③相手に得をさせる---顧客の立場に立つこと
このうえで、適正な料金を頂戴するのである。

自分で仕事を取ってこそ、一人前のコーディネータ。当初、仕事をとるには、並々ならぬ努力（時間と頭と体を全部使うのだ）が当然必要である。たとえば、こんな風に自分に一度、義務を課してはどうか。

午前）9:00～9:30　資料整理
　　　9:30～12:00　TEL セールス（20 本、つながった相手の数）
午後）13:00～16:00　見込み客訪問（2 件）
夕方）16:00～18:00　受注物件手配

これを 3 ヶ月続ければ、TEL1200 本→見込み客訪問 120 件→受注 12 件→受注額 600 万（1 件単価 50 万として）。最初は大変だが、半分が継続客となって残ってくれれば、かなりの基礎数値が見込め、余裕をもって営業活動ができるはずだ。なによりも自分がつかんだお客様って、本当にうれしく、また自信につながるものなのである

(4) 成功実例　その 1

わたしが経験した実例をドキュメント風につづってみよう。

例 I　問い合わせを逃がさない---A 社の場合（5000 万～）

かなり遅くまで残業していてもう帰ろうかなと思った時、事務室のベルが鳴った。こういうのは大抵、やっかいな電話だ。だが、サービスを業としている以上、とらねばならない。取引先の広告製作会社の紹介だが、中国語の大量・緊急翻訳物件を抱えている。他にも当たっているが、当社でできるかとのこと。

2 週間で 1000 枚の和文中訳物件。普通なら出来ないと断るところだが、単価 8000 円として 800 万円になる仕事。2 週間必死で動き回っても、採算はとれるはずだ。5 分後に連絡するといって電話を切り、翻訳者リストに頭をめぐらす。個人翻訳者を集めてもだめだろう、処理枚数と訳文の統一性に難がある。外注先のα社はどうだ。中国語の達人を豪語する〇氏と中国語ネイティヴの奥さんが主宰する翻訳事務所で、大量翻訳処理の設備投資も進んでおり、弟子もたくさんいる。

〇氏に問い合わせると、出来るとのこと。ただし、原稿整理、専門語のチェック、レイアウトはこちらでやってもらいたい、とのこと。よし、決まりだ。さっそく、翌朝いちばんで、横浜のはずれにある A 社の事業所へ出かけ、先方担当者と段取りを打ち合わせし、原稿を受け取り、その足で都内のα社へ向かった。この時点で、〇氏の要望に応えるべく、前夜探しておいた多少の中国語心得のあるアシスタントを同行した。

応諾の返答も、客先との打ち合わせも、外注先との共同作業も、一気呵成にやる。これがこのような突発物件で肝心なことだ。あとは、α社を信頼し、進捗状況の確認と周辺雑事の処理で日をすごすのみ。

客先が指定した納品期日は、船積みギリギリであって、決して延ばせない。α社には一日短く納期を言っておいたのが、助かった。どうしてもあと一日掛かるとギリギリになって、泣きが入ってきたのだ。こちらもいたたまれず、〇氏の事務所に出かけ原稿の照合作業を手伝うが、納品当日の夕刻になってもまだかなりの修正がある。A 社には翌朝の始業時までに完納するので待ってくれるようお願いした。当日朝、6:00 に不安な気持ちでα社を訪れると、完成していた！

地下鉄、東海道線、私鉄、タクシーと乗り継いで、A 社事務所に着いたのは 8:50。先方担当者の、やきもきする顔が目に入った。それが数分後には、笑顔にかわり「いや、ありがとう」の一言をもらって、わたしは事務所を出た。随分気を使う仕事ではあったが、やってよかった。大きな仕事をやり終えた満足感で、街道沿いの変哲もない喫茶店で飲むモーニング・コーヒーがやけに旨かった。

A 社はその後も、当社担当者のフォローよく、累積で 5000 万以上の仕事になっている。

(4) 成功実例　その 2

例 II　ご紹介を逃がさない---B 社の場合（10000 万）

大口顧客のβ社の営業課長〇さんからの紹介だった。社は英語版を日本語化したコンピュータ教育教材を販売しているが、その売り込み先の B 社の担当者と雑談をしていたら、翻訳に困っていてどこか業者を探している、とのこと。

すぐに B 社に電話して、アポをとった。当時日本の企業でしかできない技術を、中南米に移転するにあたってのドキュメント（技術資料）一式が、それこそトラック一杯分あって、社員の手ではとても処理しきれないという。予算は十分ある（当時日本の技術は国際競争力があったのだ。こんな世相も仕事から垣間見えるのである）から、社員の手を煩わせることなく処理してほしい、といわれた。なんと相見積もりもなく、すぐさま仕事に入った。

第一次、第二次に分け、のべ 1 年半の作業であっ

た。チーフ・コーディネータ 1 名、コーディネータ 1 名、アシスタント 1 名、そして実作業（英文の編集、といえば聞こえがいいが、切り張り・トレース・文字修正など）者最大時 8 名でのチームで、翻訳者、タイピストも時として張り付かせ、そのため別に作業用の部屋を近隣のマンションに借りて、毎日遅くまでワイワイいいながら、仕事を進めた。結果として、総額 10000 万。社員にも臨時ボーナスが出、初期の当社の翻訳会社としての基盤が整った。

でかい仕事になると、スタッフの気分も乗ってきて、社自体も活気づき、社員の技量も向上、会社も社員ももうかるものなのである。だから大型物件がほしいのだ。

(4) 成功実例　その 3

例Ⅲ　DM 反応を逃がさない---C 社の場合（1000 万）

他社のできないことをやろうとはじめた実験的に始めた出版翻訳であったが、めぼしい出版社やコネクション・紹介のあるところを回りきると、次の一手が必要になってきた。

そこでDMである。潜在顧客も無数にあって的を絞りきれない産業翻訳にくらべて、出版翻訳はその数多いといっても、実稼動している出版社は 1000 あるかないか。80 円の往復はがきであれば、8 万円で当方の存在は全社に伝わる。それで 1 社 80 万円の仕事でも受注すれば、最低の利益は確保されるだろう。コストパフォーマンスがいいのである。

結果。1000 通出して、アンケートの返信は 12 通。思ったよりは少なかったが、(A)ID に頼んでみたい (B)話をきいて検討したい　(C)興味はない　のうち、(A)と(B)で 10 通というのは、かなり高い受注可能性である。

一件一件、丁寧に電話して（相手がいなければ、何回もかける。営業っぽさを抑え、文化創生の同志として接する）アポをとってゆく。古いことなので具体的な数は忘れたが、何件かは受注につながったはずだ。そのなかでいちばんの大口が、C社であった。この会社は書籍マインドのCD-ROMソフトの製作・販売のため、電機メーカと出版社の合弁で出来たものであった（このような、出来立ての、資金力のある会社には入り込みやすい。常日ごろから新聞等に目を光らせていることが大切）。「いいところへ来てくれました」と担当者に言われた。英語版を基に西洋芸術のCD-ROMを作るのだが、特性を生かして、芸術の解説を文字と音声の両建てでやりたい。できれば翻訳とナレーションの吹込みまでお願いできれば、との要望であった。こういうとき、日頃の趣味が生きてくる。そのころでも、わたしはいくつか著訳書があり、文化的なものの翻訳については信用してもらえたが、くわえて芸術への興味と多少の知識、むかしアテレコ（外国映画の日本語版吹き替え）の声優や台本作家をしていたことからのアドヴァイスが、さらに相手の信頼を高めたと思う。一枚のトライアル翻訳をもらい、翻訳者の原稿にわたしが手を入れ、数日後に納品。勿論合格した。売り上げで 800 万、コスト 68 パーセント、期間 3 ヶ月、校正に手がかかるが楽しいしごとであった。

ただひとつ、反省点がある。音声録音は当社スタジオを使い、ナレータはオペレータ○君の使い慣れた人、でよかったのだが、ディレクター（音声演出）を頼んだ×さん（わたしの旧・翻訳塾に応募してきた元放送局のラジオ・プロデューサ）のセンスがわるく、わけても日本語アクセントが正しくとれないのには閉口した（ついにはディレクターぬきで録音したほどだ）。このひと、初期の外国映画の日本語版台本製作に従事、転じて放送局入局、ラジオ畑を歩み、音声芸術の国際的な賞の審査員も勤めていたから、安心して演出をお願いしたのだが…。経歴だけでは人を判断するのが難しいという一例。

(4) 成功実例　その 4

例Ⅳ　新聞記事を見逃さない---D 社の場合（12000 万）

A 社は D 社社員からのご紹介だが、その D 社は日経産業新聞の記事を見て、接触したものだ。「ビジネス文書管理大手の D 社がコンピュータ教育事業に進出---同社はテキスト、オーディオテープ、ビデオテープよりなる自学自習用のマルチメディア教育教材の製作販売をおこなうため、近々新会社を設立する。教材はアメリカのγ社より供与される」。

たったこれだけの記事だが、いつも面白い仕事はないかと目を配っている人間にはピンとくるものがある。

①オリジナルが英語であれば、日本語化するはず
②テキストの翻訳だけでなく、録音、撮影の仕事もあるだろう
③新会社をつくるというからには、相当量が永続的に見込めるのではないか。

まず相手を知らねばならない。ビジネス文書管理って何だ？そうコンピュータ周りのシステム化のことか、その市場が 1000 億（当時）あって、D社は大手の一角を占めているのだな。多少の周辺知識を仕込んでから、アポをとった。新会社設立準備責任

者は〇さんと△さん。IBM出身の〇さんは、業界のコンサルタントをしていたが、この事業のためスカウトされた由。△さんはD社生え抜きの一期生とのこと。根アカな〇さんとは気が合いそうだが、官僚的な△さんタイプはどうも苦手だ。だが営業たるもの、仕事をくれる人こそよい人であって、相手の選り好みをしてはならない。相手好みの自分をつくることも必要だ。

結局、見積もりと製作進行のプレゼンテーションを三社競合ですることになった。当社のほかは、当時業界大手で通訳・国際会議に強い甲社と機械翻訳の草分けの乙社。

当社はこの仕事のために新たに新聞広告にて翻訳者を募集し、また旧来の翻訳者のめぼしい人には本件のためのオーディションへの参加を呼びかけた。こうして選んだ3名の訳文を持って、プレゼンテーションにいどんだ。競合他社と違い、翻訳だけでなくオーディオやビデオの製作にも対応できる利点も強調した（ビデオの知識は、制作会社にいた人から即席に仕入れたのだ）。

結果、業歴も浅く、規模も小さい当社が一括受注。発注先担当者との人間関係で苦労もあったが、月づき 300～400 万平均のしごとが数年続き、当社の基礎数字の確保に貢献した。この数字があるから、余裕をもって、つぎの戦略展開がはかれたのである。

だが、結末は急にやってきた…。トップが交代し、新しいトップは一連の作業見直しと称し、内部体制改変と同時に、お決まりの外注費削減を宣言した。いや受け値が下げられたのはなんとか工夫でしのいだものの、最終的に、そのトップの懇意（生臭くてまだ書けない）にしている業者に仕事は丸ごとふられてしまったのだ。残念ながらこれは不可抗力としかいいようがない。

(4)成功実例　その5

例Ｖ　展示会資料を活用する---E 社の場合（800万）

アップル・コンピュータのフェアであった。幕張まで出かけて、めぼしいブースでかたっぱしから資料を漁る。休憩所でコーヒーを飲みながら、営業のヒントになりそうなパンフとそうでないパンフを仕分けする。なりそうなパンフを社へ持ち帰り、どれをもとにセールスするか、じっくり考える。時間もエネルギーも一人の人間には限られている。だったら多くの情報から、いちばん効率のよさそうなものを選んでトライせねばならない。営業は頭を使う仕事なのだ。

参加百二十社の紹介が網羅されている総合パンフレット一本に絞った。参加各社の業態、営業内容に加え、フェア担当者の名前までのっている。これは凄い。そこそこの企業に電話して、翻訳業務とかマニュアルとか海外文書とかご担当の…、とお願いしても曖昧すぎてうまくつながらないことが多いし、交換する人にこちらの接触希望先の見当がついても、営業だと思われるとつないでもらえない場合もある。もちろんフェアの担当者が翻訳関連部署であるとは限らないが、得てして広報・宣伝などをやっている人は、人当たりが柔らかく、親切に該当部門を教えてくれたりするものなのである。

えり好みはせず、可能性があろうがなかろうが、全部の会社の人と電話で話すことを義務ときめた。毎朝 10 時に電話を開始し、昼ちかくまでつづける。単純計算すれば、一日 10 本で 12 日にて完了、のはずだがとてもそうはいかない。電話中、出張中、外出、休暇、打合せ中、などなど、一回で目指す相手につながることはまずないと思ったほうがよい。うまくつながれば、アポイントをお願いする。いまのところあまりない、といわれても、いざというときのためにあらかじめお聞きいただきたいから、などと粘って、アポをいただく。売り込みに躊躇は禁物なのである。どうしても会ってくれないところへは、当社資料一式にご挨拶をペン書きでのひとこと添えて送っておく（せっかく出したなら、1 ヶ月後、3 ヶ月後、半年後、1 年後とご挨拶を繰り返すことも大事だ。ちょうどそのとき、またどこか他の部署にニーズがあるとき、思い出してくれるからだ）。

結果、移転、閉鎖、合併などでどうしても連絡のとれない 3 社を除き 117 社とコンタクトした。3 ヶ月かかったが、マラソンを完走したようないい気分だった。自分のなかに、営業をイベント化するお茶目心がないと、連日の売り込みはつらいかもしれない。成約に至ったのは 3 件。頭と体と時間を使えば確実に結果は出るのである。いちばんの売り上げとなったのは、E社。コンピュータ関連図書の発行元だが、一般書籍をちょうど手がけるところだった。その第一弾、ノンフィクション 4 冊を 800 万で受注した。一般書籍の受注はこのときがはじめてであり、こちらも不慣れだったが、先方も編集力に欠けていた。トラブルもあり、コスト 78 パーセントと高かったが、これでわたしは出版翻訳のノウハウを獲得しえた。真摯に取り組めば、仕事は技量を上げてくれるのである。

(4)成功実例　その6

例Ⅵ　飛び込み訪問で情報を辿ってゆく---政府系文

化機関Ｆの場合（3500 万～）

当社の営業マンが何人かやめ、売り上げがごそっと減ったことがある。DM と電話セールスで小口を着実にふやし、一方、的を絞った営業で大口の受注を狙った。

政府関連の国際機関を飛び込みで攻めた。そのうちで、うまく当たったのがFである。まず受付にゆき、翻訳・通訳関連の部署をきくと、それぞれが適当に内部・外部で処理しているとのことだった。ならば直接当たるべし。片端から内線電話をしてゆくと、そのうち親切なひとにつながった。じっくり話をきいてもらったうえで、当社業務に関連ありそうな部署と具体的な人名を教えてもらう。そのうえで、「○○さんのご紹介で…」といって（勿論ご本人の了解はもらう）、もう受付を通したり、内線電話でなく、直接当該部署の部屋におしかけた。十数人まで訪ねたところ、視聴覚課で来年映画祭をやるという情報を得た。早速、その課の課長、○氏をたずね、翻訳・通訳ができるところならいくらでもあろうが、映画に造詣深い翻訳会社は当社のみ---何しろ国際的映画賞受賞の某監督には可愛がっていただいて（まるでウソではない）…等々、のトークで相手を信用させ、特命発注（相見積もりなく受注すること）で、一気に 3500 万以上の国際イベント「外国映画祭」を受注した。翻訳・通訳のみならず、シンポジウムの設営、マスコミ広報、パンフレット製作、来日監督のエスコート、映画字幕の制作など、当社ではじめての大型イベントだった。

この進行管理はマネージャー×君の当社での実質的初仕事であった。同君の奮戦よろしく、コストもそこそこに抑えられ、イベントは無事終わった。反省としては、広報の力至らず、また天候に恵まれず、観客動員がいまいちだったことが悔やまれる。

⑷成功実例　その７

例Ⅶ　業界調査を装い、実は営業する---G 社、機械翻訳プロジェクトの場合（8000 万）

もう知っている人は少なくなったが、じつは当アイディは「電子辞書の草分け」（日経産業新聞）である。孫正義が電卓型のささやかな電子単語帳をつくりシャープに１億円で買ってもらったのが、いまをときめくソフトバンクのはじまりということになっている。そのあとアイディが大手のソフトハウス、東洋情報システムと共同開発したのが、「日本初の本格的な電子辞書」といわれる「電字林」。当時、関連業界でもけっこうな話題になった。この話をフリに、コンピュータ・ソフトのトップ企業 G 社 の新規事業部門に売り込んだ。「翻訳業界では将来的に機械翻訳が待望されているが、御社の取り組みは如何か…」というわけである。

新規事業の窓口である社長室につながれ、アメリカ留学から帰ったばかりのやり手の若手（そのあといくらか付き合ったのだが、名前は失念）の某氏が対応してくれた。翻訳の発注部門を教えてもらおうとの下心があったのだが、彼は当社の電子辞書実績に興味をもち、ちょうどこれから機械翻訳をやる部門があるからと、その責任者を紹介してくれた。

その○氏に信用され、G 社機械翻訳プロジェクトに製品評価と辞書作りの要員を十名以上送り込むことが決まった。単なる翻訳者ではないので、手持ちのスタッフリストでは間に合わず、朝日新聞その他に募集広告を出し、必要な人材を集めた。この進行管理はマネージャー×君がつつがなく取りまとめ、3 年弱、総額 1 億近い売り上げに貢献した。

⑷成功実例　その８

例Ⅷ　下請けから直請けに変わる---H 社、都下工場人材派遣の場合（4000 万）

JC（日本青年会議所）の先輩、印刷会社専務の○さんから、技術者派遣会社をやっている義兄を紹介された。H社に出入りしていて、海外に出すドキュメント（技術資料一式）の仕事があるのだが、どこか下請けを引き受けてくれるところがないか、とのこと。H社は業者登録制で、なかなか入り込むのが難しい。直でないのは屈辱的で、当然利益も少なくなるが、仕事をもらえるだけでも上等だ、請けなければ一銭もお金は入ってこないのだから。

決心して先方の課長に会った。H 社の子会社、H 研究所。つまり H 社→H 研究所→ナントカ技研→アイディ、のながれで三次請けだ。建設や広告業界によく見られる構造。下へいけばいくほど、条件はきつくなる。

それでも苦労して、英語と編集とオペレートのできる人材を最大期には 8 人送り込んだ（そのうちの 2 人がめでたく結婚）。結構気に入ってもらえたのだろう、一年もたった頃、課長に呼ばれ、三次請けはまずいので、ナントカ技研をはずしてもよいかと聞かれた。もちろん異存はなく、ナントカ技研さえよいといってくれれば、と答えた（企業信義上、この配慮は必要）。やがてプロジェクトが縮小になってきたとき、H 社本体の主任に呼ばれ、黙守義務のあるおおきな仕事があるのだが、ついては H 研究所をはずさせてもらいたい、といわれた。これも先

方さえよければ、当然 OK である。ついに 2 年かかって、H 社の口座がとれたのである。さあこれから、がんがん開拓して…と思った矢先に、平成大不況。H 社もめったことでは派遣人材をとってくれなくなった。

いまは細々ながら、マネージャー×君が、二つの事業所の人材派遣、翻訳を按配している。情報通信事業に薄日がみえる中、また大きく巻き返してほしいものだ。

⑷成功実例　その 9

例Ⅸ　相手の無理な条件をクリアする---I 財団（300 万～）

飛び込みセールスで財団関係をあたっていたとき、うまい具合に「ちょうど翻訳を出そうかと思っていたところ」という職員に巡り合った。<u>これも数をこなしていればこそのこと、ころりころげた木の根っこはありえない</u>。

〇さんというその職員は世界中を漫遊したという変り種。語学への興味もひとしおで、翻訳をめぐる異文化ギャップの話で盛り上がった。信用を得て、当社に発注してくれることになったが、予算技術上から特命発注にしたい、という。こちらとしてはありがたいことだが、そのための条件を出された。この会社に専一に依頼するのがよいという、客観的な資料を作ってくれというのだ。これには内心参ったが、二つ返事で OK し、帰りの電車のなかで策をめぐらせ、次のように決めた。

情報関連の小さな業界紙を出している知り合い（元は当社に取材に来たのだが、同じ友人がいることがわかって仲良くなっていた）に頼み、別刊調査号として翻訳会社の特集を組んでもらうことにした。うすぺらでタイプ打ちして 3、4 枚の、主な翻訳会社の特徴を記したレポート。ラフ原稿をわたしが書いて、彼がまとめた（ウソは書いていない）。謝礼はなし、あとで一杯飲ませることで、了解してもらった。

確かに当社はその当時、建設関連の翻訳受注がわりと多く、少し表現をふくらませるぐらいで相手に納得してもらえる材料はあった（業歴 30 年を重ねたいまでは、およそどんな分野の実績をだせといわれても、対応できるだろう。これは長くやっていることの強みだ）。

提出して、もちろんパスした。これが 300 万の初仕事、以後×君が引き継いで、親法人の公団にも食い込んでしばらくよい仕事をしたが、いつからか価格破壊の同業者に苦戦し、発注は先細りになっているようだ。搦め手をあみだし、また盛り返してほしいと思う。

⑷成功実例　その 10

例Ⅹ　新聞求人情報から発注へ---J 社の場合（800 万～）

情報ソースはどこにでもある。

朝日新聞日曜版は求人募集が多くて、楽しめる。もっとよい会社ないかな…いけない、わたしは社長だった。景気の動向や人気業種の推移、求められる人材の変化などが、容易にみてとれる。

ラブロマンス・シリーズをご存知だろうか。外国に本社のある出版社で、女性向けのソフト・ロマンスに特化した書籍を全世界規模で展開している。あるとき、その日本法人の広告がのっていた。「新たなロマンス・シリーズを始めるにあたり、翻訳者を募集する。力量により上訳、下訳、リーディングなどをお願いする」とある。

当然、個人を対象にしたものだが、募集側の編集者の立場に身をおいて考えてみれば、煩雑な募集手続き、品質評価、面談などほんとうはやりたくないはずだ。ここに翻訳エージェントの出番がある。早速、手紙を書いて、採用代行作業を当社にやらせていただけないかと、提案した。

だいぶたってから、編集長の〇さんから連絡をいただき、先方にうかがった。おいおい協力していただきたいとの話であった。だがそれからずっと声はかからず。だが念のためと思って、わたしが翻訳関連著書を上梓したとき、それを送っておいた。するとすぐに、応答があり、実はその会社をやめ、古巣であるΣ社に戻り、科学書、翻訳書の編集をすることになった、ついてはこんどこそいろいろ協力をお願いしたいとのことである。この間、一年半ぐらい経っている。<u>一度営業したら、しぶとく粘るものである</u>。

Σ社では、いきなり世界文学シリーズ 30 巻の翻訳をやらせてもらった。この頃わたしは、次代の翻訳者養成のための私塾をアイディ内に設けており、翻訳者の卵を鍛えながら育てていくシステムがうまく起動した。卵は翻訳書デヴューでき、アイディは低い受注単価でも適正利益を得ることができたのである（一冊単価 30 万（安い）で、新人翻訳者への払い 15 万（もっと安い）、別の新人が校正して 3 万。外注校閲が 5 万。コストは高いが内部の手はかからないようにした）。<u>ニーズとシーズをうまく結び合わせるのが本物のコーディネータだ</u>。その後は、マネージャー×君担当になり子供向け図鑑シリーズ、

ムックシリーズなど、たてつづけに発注いただいき、合計何千万の仕事になった。いまは、出版不況のせいか発注はとだえているが、また復活してほしいものだ。

(5)失敗実例　その 1

過去の栄光は、いくらでも語れるもの。

仕事を取り逃がした実例で、失敗の本質を見極め、以後の営業活動に生かしてもらいたい。

以下はわたしの失敗実例である。

例Ⅰ　情報は早く入っていたのに、出足が遅かった---東京国際映画祭の場合

成功実例にでてきた外国映画祭の仕込みの最中、雑談のなかで関係者から別の映画祭が企画されているとの話を、小耳にはさんだ。

東京都と広告代理店の東急エージェンシーが中心になって、カンヌやベネチア、ベルリンに負けない国際映画祭を 2 年後に開催する計画であるとのこと。この時点ですぐ営業にいけばよかった。現に外国映画祭を進行させている実績は、だれからも信用されるだろうし、関係者からの紹介で東京都も東急エージェンシーも当該部署にすぐたどりつけるはずであった。いざとなれば、日本の著名監督に知り合いがいて担ぎだせるし、映画評論の重鎮、代表的映画研究者、外国映画現場畑の草分け、などお願いすれば人肌脱いでくれるキーパースンが、このとき周りにいくらでもいたのである。

だがわたしはゆかなかった。当面の映画祭のことで頭がいっぱいなのと、こういった映画イベントを仕切れるのはウチが一番、向こうから頼んでくればいい、などと傲慢にも考えていたからだ。結局、外国映画祭が終わり、しばらく経ってから、関係者某氏の紹介で東京映画祭の実行委員会室を訪ねたのだが、すでに翻訳・通訳大手の同業他社に事務局は決まっていた。「もうちょっと早く来てくれていれば。おたくがぴったいなのですがね…」といわれたのも、あとの祭り。

この映画祭は毎年開催、事務局予算だけで 3〜5 億になるという。当社の一大飛躍のきっかけになれたはずの大仕事を逃したのは、いまでも心が痛む。

反省：

①情報は入手した段階で、すぐアクセスすべきである

②営業は仕事をとってナンボ。つまらないプライドは捨てねばならない

(5)失敗実例　その 2

例Ⅱ　情報をキャッチできなかった---L 社「電子百科」の場合

L 社には人脈があった。IC カードを手がけていたとき、講師をお願いした〇さんは大幹部になっていたし、産業系の出版社で付き合いのあった△さんは、L 社出版物の部長で転出してきた。アイディ製の電子辞書を販促課長の×さんが同社のソフトに同梱してくれたこともある。しょっちゅうこういう人たちと付き合っていれば、またたびたび出かけていって周辺の人を紹介してもらっていれば、大きな魚を逃すことはなかった。

L 社が自社製の電子百科事典「××」を製作する、との情報は日経産業新聞ではじめて知った。あわてて伝手をたどって、本件責任者の□さんに面談したが、とっくに日本語版ローカリゼーションに入っている、百科事典だから相当な量があり助っ人はほしい、毎年改訂するので仕事は切れることがない、とのことであった。元請を紹介するのでその下で仕事されたらどうですか、といわれた。

だがその元請は、運の悪いことに当社とは以前トラブルがあった編集製作会社。どうあってもその下請けで翻訳作業をするつもりはない。仕事自体は面白いし、当社の得意とする文化的な翻訳分野である。元請の実力もよく知っているが、当社が全力を挙げて勝てない相手ではない。早めに情報をキャッチしていれば、絶対とれたのに…。

臍をかむ思いとはこのことか、と頭でぼんやり考えながら、とぼとぼと帰社した。

反省：

①情報を張り巡らすのに、労を惜しまないこと。

②同業・関連他社とは、なるべく喧嘩をしない。

(5)失敗実例　その 3

例Ⅲ　受け入れ態勢が整っていなかった---M 社、ローカライズの場合

産業系出版社にいた〇さんが M 社に移り、しばらくドキュメント部門を統括していたことがある。当社が電子辞書の草分けであるのを覚えていて、どこかで再会したときに、声をかけてくれた。

マニュアル日本語版製作の仕事は山ほどある。いちばん食い込んでいるε社などは単年で 10 億ほどの商いになっている、とのことであった。早速、当時当社で一番コンピュータに詳しい社員だった某君

を連れて、担当の△さんを訪ねた。

△さんは元別の外資系コンピュータ会社の広報社員で、当社に翻訳を発注してくれていた人だった。これは幸先よいと思うもつかの間、話にでてくる用語がわたしにはまるで分からない。某君もついてゆくのがやっとのようだ。

それでも○さんの紹介と、かねてからの知り合いだったよしみで、トライアル物件を出してくれた。某君は当社の翻訳者に翻訳適任者がいないのと当社のソフト・ハードツールが満足できないのを嘆きながら、あるものは手作業であるものは知り合いのソフト技術者の手を借りて、なんとかこなしてくれた。

このトライアルは一応合格ということになったが、実作業段階となると進行管理者、翻訳者、必要ツール、いずれも当社には対応できるだけの用意がなく、もしこの仕事を受けようとすれば莫大な費用と時間がかかり、会社の体質自体変えることになる。それだけの覚悟がわたしにはなく、結局この仕事は辞退した。

経営者、もしくはその周辺でコンピュータを熟知している者がいたら、この仕事は進めることが出来たろうと思うと、はなはだ残念だ。

反省：

①時流の仕事へ対応できるだけの知識は興味をもって学んでおかねばならない

②設備投資ができるだけの利益をつねに確保しておかねばならない

⑸失敗実例　その４

例Ⅳ　誇り高く動かなかった---日本電子化辞書研究所の場合

日本電子化辞書研究所は政府が肝いりし、機械翻訳の実現を支援する英和・和英辞書作成のためだけにつくられた準公的団体。予算 50 億円をかけて、3 年間で数百万語の辞書を構築するというスケールの大きな話は、業界のみならず知的世界の話題になった。

このころまともに電子辞書とよべるのは当社がソフトハウスの東洋情報システムと共同開発した「電字林」ぐらいのもの。当然、そのノウハウをもっている（ほんとうはたいしたことないが、一応の自負はもっていた）当アイディに相談にくるものと、思っていた。日は去り、月はゆくが、ぜんぜんお呼びがかからない。よく考えれば、壮大なプロジェクトといっても、しょせん官庁・大企業の出向者の寄せ集めによるもの。ちっぽけな一翻訳業者に、むこうから頭を下げてくることなどありえない。　結局、これはまるで接触せずに終わった。伝え聞くところによると、翻訳大手のμ社はじめ何社かが食い込み、結構な値段で、かなりの額の仕事をこなしたという。

ちなみにこのプロジェクト、官主導のものが往往にしてそうであるように、失敗に終わった。辞書の目的が定まらなかったのと、ニーズを読みきれなかった、技術の進歩のほうが先にいった、のである。電子辞書草分けの当社がコンサルティングで入っていれば、少しは世の役に立つ辞書が出来たのではないかと、税金の無駄遣いをうらめしく思う。

反省：

①プライドを捨てよ

②実力を示せ

⑸失敗実例　その５

例Ⅴ　工夫が足りなかった---G 社、辞書プロジェクト第二期の場合

G 社の機械翻訳プロジェクトが一段落し、次に機械翻訳用の辞書の構築の話が遅まきながら当社にきた。

先方の開発費用も随分とかさんでおり、第二期ともなると結果と予算という二重の問題が入ってくる。見積もりを提出したが、全然折り合わない。こちらの原価のまた半分ぐらいの予算をほのめかされた。プロジェクト・チームも解散しており、また同じようなメンバーを集めるのにはこの予算ではムリと判断した。

結果は、わたしの友人のベンチャー起業家、○さんの会社が G 社の意向に合う低予算で丸ごと仕事をかっさらっていった。低予算とはいえ、数年の積み重ねでは 5,6 千万円の結構いい仕事になった、と当の○さんからあとで聞かされた。

楽な仕事に慣れすぎて、対応力が欠けていたのかなと、今にして思うところもある。

反省：

①情報は早めにキャッチする

②どんな条件にも対応できるコーディネート力が必要

⑹営業トーク

「彼は能力ある営業マンであった。物を売るにせよ買うにせよ、相手にぴったり合う呼吸をすぐさま身につけてしまうのだ。年寄りには真面目にかつ気をきかせ、金持ちには追従し、信心深い者にはしか

つめに、弱いものには偉そうに、未亡人には危なげに、独身女性にはお茶目で小粋に振舞った」（ロアルド・ダールの短編『牧師のたのしみ』より）
いささか茶化し気味ではあるが、営業の極意はこの通り、まず「相手の望む人物に成り代わること」。この段階では、相手・状況によって変えられるよう、いくつかのトークパターンを準備しておくとよい。そして、お客が心を開き、自分を信用してくれるようになってから、徐ろに自分を出してゆく。これは楽しい作業だ。短時間で商品を、会社を、自分を知ってもらう。やりかたに定石はないと思う。自分が組み立てた話の流れにそって、論理的に、興味深く、売り込む。朴訥でも、早口でも、生意気でも、業者っぽくても、何でも構わない。要は、自分のやりかたで、誠意をもって語ることだ。
ちなみに私の一番多用したパターンは、営業っぽく下手に出て、話の途中からコンサルタントに変身する手法だ。仕事を出してやるという顔でいた見込み客が、途中でそわそわし出し、しきりに渡した名刺に目をやりだす。「おたく」と呼んでいたものが、「柴田さん」と呼ぶようになれば、しめたもの---御発注間違いなし！

要点
①とっかかりには演技も必要。
②最終的には誠意と商品知識。
③トークの準備なしに営業はできない。

⑺営業ツール

・その業種の翻訳実績例---見せて、信用してもらうために
・相手先企業のデータ---ちらちら目をやって、熱心さをアピールするために
・業界の話題記事---話を向けて、教えを乞い一体感を醸すために

[自分用]
・自分が作った翻訳物、編集物、製作物など---実績を知ってもらうために
・自分が感銘した翻訳小説・エッセイ・業界物語など---仕事姿勢を理解してもらうために
・自腹の範囲で差し上げられるアクセサリー、しおり、絵葉書など---印象づけるために

その他、場合により、当社製作物、翻訳図書、制作ビデオ、国際会議写真集など、臨機応変に持ってゆく。
こうした気遣いのひとつひとつが、営業実績の差につながってゆくことを心せよ。

⑻顧客のメンテナンス

①足繁くうかがう
②季節の挨拶を出す
③ニューズレターを送る
④近況を E メールで送る
⑤別荘をご利用いただく
⑥たまには個人的につきあう
⑦ノベルティ・グッズを差し上げる
⑧電話で御用聞きする
⑨相手の得意そうなことで相談にうかがう
⑩当社に遊びに来てもらって、お茶でもご馳走する
…

ほかにもいろいろ考えられるだろうが、要は
・<u>仕事があればまず声を掛けていただけるようにしておくこと</u>
そのためには、スキンシップが必要だ。いかにインターネット時代といっても、会って顔を見たり、電話で声を聞いたりすれば、それだけ親近感も増そうというもの。
E メールだけでのやりとりでは、絶対に顧客は落ちてゆく。
誠意をもって、常にレギュラー顧客との接触をはかるよう心がけることが大切である。

ね、営業が一番大切というのがわかったでしょ。でも、営業が上手くて訳が悪い出版翻訳者が散見されるのは、悲しむべきこと。もし謙虚な編集者がいれば、私のところに尋ねてきて欲しい。翻訳者の実力を見抜く方法を伝授して差し上げよう。

翻訳とは何か—研究としての翻訳

翻訳通信の主宰者である山岡洋一氏は、主要著作である『翻訳とは何か—職業としての翻訳』（日外アソシエーツ）において、「翻訳とは学び、伝える仕事である」（p. 100）とし、そのことを前提に「職業としての翻訳」（第６章）を論じている。また、「ある民族が別の民族から学ぶ一助になるのが翻訳なのである」（p. 275）とし、「文化としての翻訳」（最終章）を論じている。そして結論として、「明日の日本文化を支える基盤を築く一助になるのが翻訳」であり、「翻訳［は］副業でも余技でもなく、職業として取り組むべきものである」と主張している（p. 279）。長年に亘り、翻訳に魂を注入し、翻訳と格闘してきた、まさに「戦う翻訳家」の異名をつけたい翻訳家の深淵な言葉である。

これはプロの翻訳者から見た「翻訳」の意味空間を表象した言葉であり、研究の視点から見た「翻訳」には、別の意味空間が広がっている可能性がある。そこで本稿は、「翻訳を翻訳する」と題して、「研究としての翻訳」の意味空間を論じてみたい。

翻訳とは— “translate A as B”

一般的に、翻訳はある言語を別言語に訳す作業であり、ある言語の A という表現を別の言語の B という表現に表す場合を、“translate A as B”と表現できる。ここで大切なポイントは、“as”は「等価（equivalence）」が中核的意味であり（河原 2008）、本来、記号 A と記号 B の意味（価値）は異なるが、「等しい（equal）価値（value）のものと看做して」訳すことが翻訳であり、翻訳の本質は価値付け行為であることである。つまり、翻訳は単なる言語変換行為（言語行為）のみならず、社会的・文化的・歴史的・政治的その他さまざまな価値観によって意味づけされる言葉を、訳出行為を行う者が主体的に選択し決断する社会行為でもあるといえる。

そうであるならば、翻訳行為に「学び、伝える」、あるいは「日本文化を支える基盤」という社会的価値を見出し、「プロとしての翻訳家」が主体的な価値付けを行って翻訳行為を実践することは、ひとつの重要な価値付けの賜物ではあるが、別のコンテクストで別の主体が翻訳行為を行う場合、異なった価値付けで翻訳行為に臨んでいることもあろう。

そこで、これまでの翻訳に関する理論研究を検討して、翻訳にどういう価値付けが行われているか、翻訳が（全）人類にとっていかに多様な作用・機能・役割を担っているかについて検討してみたい。

翻訳とは— “translation as X”

前節では翻訳の本質を“translate A as B”という価値付け行為であるとしたが、翻訳の本質に迫る別の方法として、翻訳の背後に潜むメタファーを抽出するやり方がある。

一般に、“as”は「等価（equivalence）」が中核的意味であり（“like”は例示）、「A as (like) X／X としての（のような）A」で表現されるレトリックを直喩、「A be X／A は X である」と表現されるレトリックを隠喩（メタファー）と呼ぶ。ここで“be”は BE 動詞であり、存在や説明を中核的語義とするが、この「A be X／A は X である」という言語表現には記述文・定義文・隠喩文の３つの機能があり（田中 2000）、特性記述や操作定義のみならず、隠喩（メタファー）を表出する表現でもある。

山岡氏の表現では、「職業としての翻訳」、「文化としての翻訳」は直喩に当たり、山岡氏は翻訳を職業と看做し、翻訳は文化であるという価値付けを行っているのである。また、「翻訳とは学び、伝える仕事である」、「明日の日本文化を支える基盤を築く一助になるのが翻訳」、「翻訳［は］副業でも余技でもなく、職業として取り組むべきものである」は記述ないし（広義での）隠喩に当たる。まさに翻訳をそのようなものと看做し、それを言語化することによって、翻訳の本質に迫ろうとしているのである。

そうであるならば、これまで多くの翻訳理論家が紡ぎ出してきた「○○としての翻訳」とか「翻訳（と）は○○である」、あるいは「○○としての翻訳者」とか「翻訳者（と）は○○である」という言説を多く収集し、分析・体系化することで、「翻訳」という概念に潜むメタファーを詳らかにし、多元的・多面的・多義的な「翻訳」という概念の本質に迫ることには大きな意義があるだろう。

翻訳とは—翻訳実務家（実践家）の視点

有名な標語としては、“Traductore, traditore.”（ラテン語）、“Traduttore, traditore.”（イタリア語）があり、これは翻訳不可能性（untranslatability）を語る翻訳への否定的な評価を伴った謂いであるが、同時に、翻訳がどうしても原文を裏切らざるをえないのであるならば、いかに上手に裏切るかが翻訳者の使命でもあるという積極的な創造性を語る謂いとも解釈される。あるいは、別宮貞徳氏は「芸術として

の翻訳」として演奏とのアナロジーについて論じているが（別宮 1975）、これも翻訳の創造性について語ろうとしている謂いである。逆に、中村保男氏は「翻訳は創造か」というテーゼをめぐって、「翻訳者は単なる仲介者または紹介者ではなく、文学思潮の先端を行く啓蒙家」であり「原作者の思想の解説者であり、ひいては代弁者でさえある」という主張を退け、「翻訳は原作をなぞる行為なのであるから創造ではないのだ」、「いわば“第二芸術”」であると論じている（中村 1973）。他方、清水幾太郎氏は「翻訳者は仲介役」と題して「翻訳者は外国の著者と日本の読者とを結びつける仲人のようなもの」と論じており（清水 1995）、翻訳の創造性については言及していない。

このように、翻訳実務家（実践家）が自らの翻訳行為について内省的に論じることには、経験に裏打ちされた信頼性はあるものの、客観的かつ妥当な確固たる分析手法が欠如したまま主観的に論じている面もあるため、Karl R. Popper 氏が唱える反証可能性（falsifiability）がなく（Popper 1959）、非科学的であると言わざるを得ない。尤も、メタファーはかような個人の内面における主観的意味空間の表出であり、反証に馴染まないものかもしれないが、往々にしてかような主観の表明は Giddeon Toury 氏の言葉を借りれば「部分的で偏向しており、極めて慎重に取り扱わなければならない」（Toury 1995, p. 65）ことも確かである。

そこで、分析の方法論が制度的に担保さている（と想定される）翻訳理論家（研究者）による分析を本稿では取り上げてみたい。

翻訳とは—翻訳理論家（研究者）の視点

学問としての翻訳の捉え方が、実務としての翻訳の捉え方と決定的に異なるのは、それを分析する視点が俯瞰的、体系的かつ多様であることが挙げられる（時として偏狭的な視点のものもあるが、その偏狭性の背景にある社会的コンテクスを読み込むとその主張の真意が分かって面白い）。筆者が見るところ、学問としての翻訳は、以下の８つの大きな多様性の視点に支えられているように思う。箇条書きで示してみよう。

【翻訳学における８つの多様性】

(1)「翻訳」概念の多様性：何を翻訳とするか？
　翻訳の定義、射程、類似概念との峻別：trans-literation、adaptation、appropriation 等
(2)「翻訳」の対象の多様性：何を翻訳するか？
　文学、新聞、広告、映画、ウェブ情報等から、非テクスト情報・出来事まで
(3)「翻訳」言語と文化・社会の多様性：何に／から翻訳するか？
　メジャー言語（英語）、マイナー言語：言語覇権と言語エコロジーの問題
(4)「翻訳」方法の多様性：何の道具で翻訳するか？
　CAT（翻訳メモリ、機械翻訳）等
(5)「翻訳行為」の「主体」の多様性：だれが翻訳をするのか？
　プロの翻訳者、他分野におけるノンプロによる翻訳行為、素人の翻訳行為
(6)「翻訳」研究の対象の多様性：何を翻訳研究の対象にするか？
　テクスト（翻訳物そのもの）、文化・社会（翻訳行為がなされるミクロおよびマクロ・コンテクスト）、翻訳者自身（翻訳者のライフ・ヒストリーやハビトゥス）等
(7)「翻訳」研究の手法の多様性：何の分野から翻訳を研究するか？
　言語学、社会学、哲学、文学、心理学、脳科学、ポスト・コロニアリズム等
(8)「翻訳」研究の担い手の多様性：どこの研究者が翻訳を研究するか？
　ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、オセアニア、アフリカ：decentering、deEuropeanization の問題、非自民族中心主義的翻訳理論の可能性

これ以外にも多様性の局面はあるだろう。いずれにしても、これほど翻訳空間が多様な広がりを見せている現代においては、十把一絡げに「翻訳とは何か」を、一元論的には論じ得ないと言えよう。人類にとっての翻訳の社会的意義はそれほど多様だと言える。

そこで、上記８つの論点をできるだけ網羅し展開する形で、筆者の目に留まった先行研究をできるだけ多く取り上げて、翻訳をめぐるメタファーから翻訳の本質論に迫る論稿をシリーズ化して投稿したいと考えている。

今回は「翻訳通信 100 号」を記念して、本稿「翻訳とは何か—研究としての翻訳」の総論めいたことを記したが、予告として今後取り上げる翻訳をめぐるメタファーを若干列挙してみたい（断りがない場合は翻訳は筆者による)。次号以降で、翻訳をめぐるメタファーとその説が拠って立つ視点の社会的コンテクストや学説状況を体系的に分析してゆきたいと考えている。

【翻訳学における翻訳メタファー：翻訳本質論】

■翻訳とは―記号論・言語学からの視点
（Jakobson 1959/2000, p. 139）

(1) Intersemiotic Translation: 記号間翻訳（ある記号を別の記号で表現する）
(2) Interlingual Translation: 言語間翻訳（ある言語を別の言語に翻訳する）
(3) Intralingual Translation: 言語内翻訳（ある言語内で言い換えをする）
・言語間翻訳は、ある言語のメッセージを別の言語の個々のコード・ユニットで置き換えるのではなく、メッセージ全体で置き換えることである。

■翻訳とは―翻訳の創造性とイデオロギー性からの視点（Tymoczko & Gentzler 2002, p. xxi）

翻訳とは、単なる忠実な再現行為ではなく、むしろ選択、組み合わせ、構造化、模造という意図的で意識的な行為である。そして時として、改ざん、情報の拒絶、偽造、暗号の創造ですらある。このように、翻訳者は想像力豊かな作家や政治家と同じように、知を創造し文化を形成するという権力行為に参画している。

■翻訳とは―ニュース翻訳からの視点
（Bielsa & Bassnett 2009, p. 63）

ニュース翻訳では、ジャーナリストは目標言語のメディアの規則や慣行に従ってそのコンテクストに合致するようにテクストをリライトしなければならない。これには起点テクストの変容が相当程度伴い、結果として目標テクストの内容が大きく変わってしまう。他方、ニュース翻訳のプロセスは編集プロセスとそれほど違うものではなく、ニュース記事がチェックされ、修正・訂正され、洗練されて発表されるのである。

■翻訳とは―翻訳指導からの視点
（Newmark 1981, p. 39、訳はマンデイ 2009 準拠）

・翻訳は「技芸（art）」（意味重視の翻訳の場合）、「技術（craft）」（コミュニケーション重視の翻訳の場合）である。
・コミュニケーション重視の翻訳は、翻訳の読者に、オリジナルの読者が得たのとできる限り近い効果を与えようとする。意味重視の翻訳は、第二の言語［目標言語］の意味的・統語的構造が許す限りできるだけ近いかたちで、オリジナルの正確な文脈的意味を訳そうとする。

■翻訳とは―翻訳ストラテジーからの視点
（Vinay & Darbelnet 1995, p. 16、訳はマンデイ 2009 準拠）

翻訳者の役割は、使える選択肢の中から選択して、メッセージのニュアンスを表現すること。

■翻訳とは―関連性理論からの視点
（Gutt 1991/2000、訳はマンデイ 2009 準拠）

翻訳とは推論（inferencing）と解釈の因果モデルに基づくコミュニケーションの一例である。

■翻訳とは―行為理論からの視点
（Holz-Mänttäri 1984、訳はマンデイ 2009 準拠）

言語間翻訳は「起点テクストからの翻訳行為」であり、一連の役割や関係者が関与するコミュニケーション過程として説明される。

■翻訳とは―目的・機能理論からの視点
（Reiß & Vermeer 1984/1991, p. 66、訳は藤濤 2007 準拠）

翻訳は、コミュニケーションを別言語で引き継ぐものではなく、先行するコミュニケーションについての新たなコミュニケーションである。

■翻訳とは―テクスト分析からの視点
（Nord 1988/2005、訳はマンデイ 2009 準拠）

・記録としての翻訳は「原著者と起点テクストの受け手との間で、起点文化コミュニケーションの記録としての役割を果たす」。
・道具としての翻訳は「目標文化の中での新たなコミュニケーション行為において、自立したメッセージを伝達する道具としての役割を果たす」。

■翻訳とは―規範論からの視点
（Toury 1995, p. 13、訳はマンデイ 2009 準拠）

翻訳はまず何よりも目標文化の社会・文学システムの中に、ある位置を占めるものであり、この位置がどのような翻訳方略を採るかを決定する。

■翻訳とは―文学翻訳からの視点
（Lefevere 1992, p. 9、訳はマンデイ 2009 準拠）

翻訳は、誰が見てもはっきりと分かる書き換え（rewriting）の典型である。そして［...］翻訳は、最も大きい影響力を秘めている。なぜなら、翻訳は作者やその作品のイメージを、原文の文化の境界を越えて映し出すことができるからだ。

■翻訳とは―フェミニズムからの視点
（Gauvin 1989, p. 9; Simon 1996, p. 15、訳はマンデ

イ 2009 準拠）

私の翻訳実践は、女性に資するために言葉を語らせることを目的とする政治的な活動である。したがって、翻訳に私の署名をすることは以下を意味する。この翻訳では、言語において女性の存在を目に見えるものとするために、あらゆる翻訳方略を活用している。

■翻訳とは―ポスト・コロニアリズムからの視点
（Niranjana 1992, p. 2、訳はマンデイ 2009 準拠）

実践としての翻訳は、植民地主義のもとで機能する非対称的な権力関係を形作ると共に、その中で自らを具体化していく。

■翻訳とは―ポスト・コロニアリズムからの視点
（Wolf 2000, p. 142、訳はマンデイ 2009 準拠）

翻訳者はもはや異なる二つの極の仲介者ではなく、翻訳者の活動は差異を内包する文化的重なりの中に刻みこまれるものである。

■翻訳とは―アイルランドからの視点
（Cronin 1996, p. 49、訳はマンデイ 2009 準拠）

文化レベルでの翻訳は、領土レベルでの翻訳に対応する。前者はイングランド文化の受容であり、後者は住民の強制的な退去と移動を意味している。

■翻訳とは―イデオロギー論からの視点
（Levine 1991, p. 3、訳はマンデイ 2009 準拠）

翻訳は批判行為であるべきで［...］、疑義を呈し、読者に疑問を投げかけ、原文のイデオロギーを再コンテクスト化するものであるべきだ。

■翻訳とは―解釈学的運動からの視点
（Steiner 1998, p. 413、訳はマンデイ 2009 準拠）

良い翻訳とは［...］、不可入性と侵入との、そして手に負えない異質さと「安住感」との対立が、決着のつかないままに、しかし表情豊かに残るような翻訳である。

■翻訳とは―翻訳哲学からの視点
（Benjamin 1969/2004, p. 81、訳はマンデイ 2009 準拠)

真の翻訳とは、訳文を透けて輝き出るものであり、原作を覆い隠すこともなく、原作の光を遮るものでもない。そうではなく、翻訳という固有の触媒によって強められた分だけ、いよいよ豊かに純粋言語の影を原作の上に落としかける。これは、とりわけシンタックスを移すという形での逐語性によって可能となる。語が、文でなく語こそが、翻訳者の仕事の原要素であることが示される。

■翻訳とは―人類学からの視点
（真島 2005, p. 10, p. 34）

・喩としての翻訳。［...］情報伝達にさいして情報の発信者と受信者が個別に遂行するのは、つねに一種の翻訳行為―自己の「内面」の翻訳、および情報媒体の翻訳―である以上、いかなる言表、伝達、解釈であれ、それは一種の「翻訳」と解されてきた。
・翻訳とは単に「主体」を発見しあるいは棄却するための喩である以上に、［...］「主体」を両義的に、つまりみずからのうちに他者の痕跡がつねに織り込まれ読み取られる場、能動と受動の拮抗をはらんだ間テクストの場として問いなおしていくための特権的な喩にほかならない。

■翻訳とは―ドイツ・ロマン主義からの視点
（ベルマン 2008, p.13, pp. 15-16, p. 379, p. 380, p. 382、訳は藤田省一氏による）

・翻訳において忠実と背信が絶えず問題となるのは確かである。「翻訳するとは」、フランツ・ローゼンツヴァイクは書いている、「二人の主人に仕えることだ」。これが召使の譬喩である。翻訳者は原作・原著者・外国語（一番目の主人）に仕えるとともに、読者・自国語（二番目の主人）にも仕えなくてはならない。ここに、翻訳家の悲劇とでも呼びうる状況が生じることになる。
・ところで、翻訳はここで両義的な位置を占めることになる。一方でそれは、［...］他文化の我有化と還元という厳命に服し、自ら進んでその手先となりもする。かくして自民族中心主義的翻訳、あるいは「誤った」翻訳と呼べるだろうものが産出されることになる。だが他方で、翻訳行為の倫理的狙いはそのような命令と本質的に背馳するものだ。翻訳の本質とは、開け、対話、混血、脱中心的運動たることだからである。翻訳は関係づける。さもなくばそれは何ものでもない。
・知の新たな対象としての翻訳―このいい方にはふたつのことが含意されている。まず、経験そして具体的作業として翻訳は、諸言語や諸文学、諸文化、交換や接触の諸作用についての固有の知をもつものである。この固有の知を明示し、分節化し、この領域の関わる他の様態の知や経験と比較検証する必要があろう。つまりその意味において

翻訳はむしろ知の主体、知の起点ならびに起源とみなされなくてはならないということだ。
・諸言語・諸文化の相互コミュニケーションの一特殊事例でありながら翻訳は、同時にそうしたコミュニケーションそれぞれのプロセスに対する特権的なモデルでもある。
・文学のそれであれ、哲学や人文科学のそれであれ、翻訳の果たす役割はただ受け取って伝えるだけ（transmission）にとどまりはしないというものだ。傾向としてはそれは伝達どころか、あらゆる文学、あらゆる哲学、そしてあらゆる人文科学の創設を司るものなのである。

■翻訳とは―紛争解決のためのナラティヴ理論からの視点（Baker 2006, pp. 1-2）

・翻訳と通訳は戦争という制度の一部であり、したがって、主戦論者から平和活動家に至るあらゆる当事者による紛争を管理する点において大きな役割を果たしている。
・翻訳と通訳はさまざまな点で紛争の展開の仕方を形づくることに関与している。第一に、［...］宣戦布告は結局「言語行為」である。明らかに、言葉による布告は他方当事者にその言語で伝えられなければならない。［...］第二に、ひとたび宣戦布告がなされたら、それに関連する軍事作戦は言語活動を通じてのみ始まり、継続される。［...］第三に、軍人のみならず文民までもが戦争を開始し支持するように動員されることになる。［...］最後に、戦争がひとたび進行すると、紛争終結の仲介や管理をする試みがなされるが、それは典型的には秘密裏の交渉だけでなく、会合、会議、公開セミナーの形が取られ、これには翻訳者や通訳者の仲介が必要である。［...］おそらく上記のことより重要なのは、翻訳と通訳はそもそも暴力的な紛争のための知的、道徳的な環境を作るナラティヴ（物語）を伝え広め、かつそれに抵抗するために必要不可欠なのである。問題となっているナラティヴが直接紛争や戦争を表していない場合でもそうである。

その他、際限なく翻訳についてその本質論を多様な視点から論じている学説が多岐に亘って展開されている。

ここでひとつ、ジョルダーノ・ブルーノによる1603 年の言葉を引用しておきたい。
（ベルマン 2008, p. 382）

すべての学問は翻訳からおのおのの子を授かったのだ。

まさに、翻訳学という学問も翻訳によって日本でも展開され、翻訳によって日本から発信されることが今後期待される。翻訳の意義は、翻訳実務家・翻訳理論家だけでなく、一般の人々にとってもますます増大すると言える。

参考文献

Baker, M. (2006). *Translation and conflict: A narrative account*. London/New York: Routledge.

別宮貞徳（1975）『翻訳を学ぶ』八潮出版社

ベルマン, A..（著）・藤田省一（訳）（2008）『他者という試練：ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房［原著：Berman, A. (1984). *L'épreuve de l'étranger: Culture et traduction dans l'Allemagne romantique*. Paris : Éditions Gallimard.］

Bielsa, E. and Bassnett, S. (2009). *Translation in global news*. London/New York: Routledge.

藤濤文子 (2007)『翻訳行為と異文化間コミュニケーション―機能主義的翻訳理論の諸相―』松籟社

Jakobson, R. (1959/2004). 'On linguistic aspects of translation'. In Venuti, L. (Ed.). (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition. London & New York: Routledge.

河原清志（2008）「ことばの意味の多次元性：“as” の事例分析」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出修士論文

真島一郎（編）（2005）『だれが世界を翻訳するのか：アジア・アフリカの未来から』人文書院

マンデイ, J.（著）・鳥飼玖美子（監訳）（2009）『翻訳学入門』みすず書房［原著 Munday, J. (2008). *Introducing Translation Studies*. London : Routledge.］

中村保男（1973）『翻訳の技術』中公新書

Popper, K.R. (1959). *The logic of scientific discovery*. London/New York: Hutchinson.

清水幾太郎（1995）『私の文章作法』中公文庫

田中茂範（2000）「『AはBである』をめぐって：記述文・定義文・隠喩文の基本形式」山田進・菊地康人・籾山洋介（編）『日本語：意味と文法の風景：国広哲弥教授古稀記念論文集』ひつじ書房：15-30 頁

Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Tymoczko, M. & Gentzler, E. (Eds). (2002). *Translation and power*. Amherst & Boston: University of Massachusetts Press.

山岡洋一（2001）『翻訳とは何か―職業としての翻訳』日外アソシエーツ

翻訳者のアイデンティティ——日仏比較

翻訳者のアイデンティティについては近年、紛争や抑圧という状況での翻訳者の帰属の問題が扱われることが多い。しかしここではフランス人研究者と私自身の調査を取り上げ、社会心理学的な観点から翻訳者の自己アイデンティティを考えてみたい。

カリノウスキはパリ近郊の出版翻訳者 10 人にインタビュー調査を行い、社会学的視点から彼らの職業観を分析している（Isabelle KALINOWSKI. “La vocation au travail de traduction.” *Actes de la recherche en sciences socials*. 2002/2 – 144. Le Seuil）。一方、私は昨年、日本のプロ翻訳者 9 人（産業 2、出版 7）に PAC 分析という心理学的手法を使ってインタビュー調査を行った（Kikuko TANABE. “A ‘Personal Attitude Construct’ Analysis from the Experiences of Japanese Translators.” *Kobe College Studies*. Vol.56 No.2. 2009. Kobe College）。私の調査はテーマ抽出のための予備的調査だが、カリノウスキは明確に社会学的アプローチで分析を行っている。従って以下ではカリノウスキの分析を基本として、それに沿って私の調査結果を対比してみたい。

カリノウスキによれば、フランスでは外注化が出版業界のコスト削減に貢献しており、在宅翻訳者はその目的に合致した不可欠の存在である。翻訳料は通常は原文 1 枚（1500 字）で 120 フラン（約 2000 円）で、低落傾向にある。インタビューを受けたある翻訳者は、たとえ大衆向け小説でも「手抜きはできない」と言い、経験を積めば翻訳の質はあがるが時間もかかるようになり、体力的にも精神的にもきつい仕事である。しかし報酬は少なく、世間からも認められない。それでも翻訳者たちはそうした矛盾を、社会的束縛から逃れる唯一の方法として、あるいは孤独の中で不安に耐える「インテリ」の称号を与えてくれるものとして進んで受け入れている。カリノウスキはヴェーバーの天職概念を引き、「営利的天職」としての出版社と「労働的天職」としての翻訳者との「宿命的適合」を指摘している。

日本の翻訳者も「忍耐力」を翻訳の基本として強調していた。ベテラン出版翻訳者の「八時間座り続けられる人でないと翻訳は出来ない。あきらめがつかない人ほど良い翻訳者」という発言は、フランスの翻訳者の発言と驚くほどよく似ている。一方で出版社や読者以上に、原著者への忠実が強調されていた点はフランスと異なる（フランスの出版界は英米と同じく同化翻訳の規範が強い）。また日本では「翻訳者は黒子」等のメタファーを通して、原文への従属が翻訳者コミュニティに共有されている様子もうかがえた。原文への忠実は原文（とその文化）への従属も意味するが、翻訳者の意識次第でその自律性を示すものともなりうる。

日本での報酬については、「翻訳がコスト的に合うはずがない」と断言する出版翻訳者、「翻訳会社が不誠実で、翻訳者は単なる使い捨て」と怒りをぶつける実務翻訳者などがいて、報酬の低さはフランスと変わらない。フランスの翻訳者がそうした過酷な条件を受け入れる理由として自由さやインテリの称号を挙げるのに対し、日本の翻訳者は達成感、あるいは「次世代に残す」「異文化の橋渡し」といった使命感を挙げる人が多かった。日仏の「インテリ階級」のあり方の違いもあるだろうが、日本の出版翻訳者がより使命感、達成感を得やすい環境にいることも理由だろう。名古屋大学のイザベル・ビロドーさんの調査によれば、日本の翻訳者は表紙への名前の記載、あとがきの執筆など、フランスの翻訳者より大きな社会的認知が与えられている。私のインタビューの中でも、訳書の体裁まで助言する人、翻訳企画の採否を左右している人などがいた。

カリノウスキが挙げているもう一つの論点は学者翻訳者とフリー翻訳者の関係である。フランスの学者翻訳者は収入が保証されているため、時間をかけて評価の高い名作を訳すことができる。仕事を選べないフリー翻訳者は、「自分がどんな本を訳しているか恥ずかしくて人に言えない」こともあるという。とはいえ学者翻訳者も大学の世界では蔑視されている。どんな名作だろうと翻訳は他律的とされ、実績として認められない。さらに学術的でないとの評価ゆえに、逆に正当な報酬を要求できず、出版社にとって都合のよい存在になってしまっている。

私の調査には学者翻訳者は含まれていないが、日本では 1970 年代に至るまで学者翻訳者が出版翻訳の中心だった。その歴史的研究も最近充実してきているが、「翻訳調」という支配的規範の担い手として分析されることが多く、編集者・出版社との経済的関係、アカデミア内での位置づけなどについては、今後より詳しい分析が必要だろう。

以上、カリノウスキの分析を中心に、日本との比較を試みた。翻訳者が搾取されている状況は日仏でよく似通っているが、翻訳を続ける理由は微妙に異なっている。フランスではインテリ階級としてのプライドが、日本ではより広い社会的認知を与えられることが翻訳者を支えているようだ。

機械翻訳と翻訳の未来を考える

「翻訳通信」100号という節目だからこそ、本稿では翻訳とその未来をテクノロジーの観点から論じてみたいと思う。今や、文章を書くのにパソコンやワープロを使うのは、当たり前になっている。日本語入力ソフト、辞書ツール、インターネットは翻訳にも欠かせないツールである。一昔前は、Jamming、DDwin、PDIC等の辞書ツールを駆使して、市販の辞書や自分で作った用語集の検索を行っていたものだ。しかし最近では、単語だけでなく文章全体を蓄積したコーパスを使って、コンコーダンス検索をするためにKWIC FinderやParaConc等を使う翻訳者も多いだろう。またローカリゼーションや産業翻訳に携わる者であれば、翻訳メモリも手放せないツールになっていると思う。

最近では、機械翻訳が（再び）注目を集めている。実務の一部では、機械翻訳に下訳をさせて、修正を行うワークフローが確立している。無論、「翻訳通信」の読者のほとんどは「一流の翻訳」を志す方々であろうから、機械翻訳なんぞお話にならない、と思う人も多いだろう。確かに、機械翻訳の訳出レベルが、依然として「使えない」のは否定できない。ただ、各国語の現状を見渡してみると、機械翻訳を取り巻く状況は、我々が想像する以上に変化してきているのが分かる。

ということで、本紙面では、翻訳支援ツールとしての機械翻訳の現状を概観する。筆者は現在、大学院で翻訳ツールの研究を行っているという事情から、自分の興味に引きつけて論じるため、扱う資料は学術論文が中心になる。また、読者の関心であろう英語と日本語の機械翻訳の精度についても、現在検証中であるために、ここでは限定的にしか記載しないことをお断りしておく。先行研究として、他言語間での機械翻訳事情を理解するのに少しでもお役に立てば幸いである。

機械翻訳の系譜

機械翻訳には、大きく分けて2種類が存在する。構文解析や文型パターンを基底とするルールベース型機械翻訳(RBMT)と、コーパスデータから類似箇所を学習して適用させるデータ主導型機械翻訳(Data-Driven MT)だ。

ルールベース型は、1950年代に米国ジョージタウン大学とIBMによる共同開発で始まった。ロシア語から英語への翻訳という軍事色の強いものであった。250単語と6つの構文規則を記憶した程度のシステムであったが、コンピューターに対するナイーブで楽観的な期待とともに、世界中に広がった（宮平ほか, 2000）。しかし、その研究成果を悲観視するALPACレポートが1966年に発表されると、その後は、政府投資も削減され開発速度は衰えっていった。

復興の兆しが見られた1970年代には、欧州でSYSTRANシステムが商用化に成功する。詳細な構文解析能力を搭載し、辞書機能も充実させたルールベース型の機械翻訳がやっと本格化したのだ。

1980年代になると、京都大学の長尾教授らが提唱した用例ベース方式の機械翻訳が出現する。それまでのルールベース型に対して、こちらはコーパスデータから類似する部分を学習し、そのアルゴリズムを適用するデータ主導型の機械翻訳であった。1984年には富士通がATLAS Iを発売するなど国内でも商用化が開始した。しかし、まだ高額であり一般に普及するまでには至らなかった。それに、コストパフォーマンスの点からも、この当時の機械翻訳の精度は満足できるものではなく、機械翻訳は「使えない」という雰囲気が強まったのもこの頃かもしれない。

1990年に入ると、インターネットが普及したことでそれまでの悲観的な状況とは別に、機械翻訳の一般需要が急速に高まった。手頃な価格で購入できる機械翻訳ソフトが出回り始め、再び、機械翻訳ブームが訪れた。それでも、内部構造的には80年代から開発されていたものと大差はなかったので、訳出精度が大きく向上したわけではなかった。

2000年代になると、この状況に変化が現れる。そもそも後発のデータ主導型機械翻訳は、ルールベース型と比べてもアルゴリズムの構築が容易であるという利点と、コーパスさえあればそれなりの精度が出るというメリットがあった。しかし、逆に言えば、コーパスが無ければ役に立たないということであり、また大量のコーパスを構築する手間がネックとなっていた。しかし、インターネットの普及でコーパス集取が容易になると、データ主導型機械翻訳の精度

が向上し始めたのだ。また、開発者の直感に基づいてヒューリスティックに行わなわれていた構文パターンの計算も、コーパス量が増えたことにより、確立・統計的に算出することが可能になった。ここに、それまでの発想とは異色を放つ、いわゆる統計的機械翻訳(SMT)が台頭してきたのである。

統計的機械翻訳は、人間が翻訳したコーパスに基づいているため、訳出が自然になるという利点がある。統計的機械翻訳を採用するGoogle翻訳が2006年の機械翻訳コンペティションで優勝をするなど（NIST, 2006）、今まさに注目されるシステムなのだ。ルールベース型の訳出精度が頭打ちになっていた最中、コーパスと統計という武器を手に入れた統計的機械翻訳は、品質向上の打開策として期待されている。

現状の統計的機械翻訳は、単語やフレーズ単位での計算や階層的フレーズを用いた物など様々な種類がある。最近では、用例ベース機械翻訳に近い近似パターンマッチングアルゴリズムを採用したり、従来のルールベース型を併用したハイブリッド型が思案されるなど、さらなる発展を遂げている。コーパスから近似パターンをKWICで見つけ出すという処理は、翻訳メモリやコーパスを使った人間の翻訳者の行為に非常に近い。また、膨大なデータベースから検索を行うのは、ウェブの情報検索（エンジン）にも似ている。これら近年のインターネット関連の一連のテクノロジーが機械翻訳に融合されてきているのは興味深い。そしてなにより、翻訳コーパスが機械翻訳の性能の向上に貢献しうるという可能性は、翻訳者と機械翻訳が全く別の次元の出来事ではないことをも示唆している。原文と訳文のコーパスは、翻訳現場では、翻訳管理システム(TMS)や翻訳メモリ・サーバー(TMサーバー)等で共有されている事が多く、蓄積されたデータは、「資産」として翻訳会社や翻訳者が管理運営する。このデータが、統計翻訳にとっても重要な資料になりうるというわけだ。TAUS(注1)等の団体は、翻訳メモリをウェブ上で公開しており、今後の機械翻訳との融合には注視していきたい。

前編集(pre-edit)と後編集(post-edit)

では、機械翻訳が実際の翻訳実践で、どのように使われているのかを概観する。繰り返しになるが、機械翻訳の精度が上がってきたとはいえ、現状では、そのままで使えるレベルではない。実務翻訳で使う為には、人間の翻訳者（もしくは後編集者(post-editor)等）が関与をして、翻訳精度を向上させる必要がある。概して、この方法には2つある。

ひとつは、前編集(pre-edit)である。機械翻訳に読み込ませる前の原文を修正しておく手法だ。原文の構文構造を簡略化したり、特殊な言い回しや単語を排除したりすることで、機械でも理解しやすい文章にあらかじめ修正しておく。原文が単純な文構造になっていれば、機械翻訳の精度が上がるのというのは、想像にたやすいだろう。

具体的には、前編集に制限言語(controlled language)を用いることがある。制限言語とは、機械製造工場などで、従業員同士が作業指示書等を間違いなく理解するために用いられる標準化された言語である。英語であれば、Simplified Technical Englishとして知られているものなので、ご存じの方も多いだろう。航空機メーカー等の製造会社が独自の制限言語を持っている場合もある。最近では、英語から多言語に翻訳するソフトウェアのローカリゼーションにおいて、制限言語を使用する動きもある。

前編集に対するもうひとつの手法は、後編集(post-edit)だ。説明するまでもなく、機械翻訳の訳出結果を後から人の手によって修正することである。厳密には、後編集にも数種類がある。原文の意味が分かればよい程度に目標言語に仕上げるためだけの簡易的な後編集 Rapid post-editingや、出版や実務のレベルまでに品質を上げるFull post-editingがある(Allen, 2003)。

さて、ここで、よくある質問は、実際問題として、機械翻訳を使って後編集をするよりも、はじめから翻訳者が翻訳した方が早いのではないか、という懸念だ。機械翻訳の精度が悪ければ、そういうことになるだろう。後述するが、分野と言語の組合せによっては、後編集をした方が、効率や品質が上がることが実証されている。また、先の前編集と組み合わせて後編集を行えば、それに必要な労力も低減すると予想される。

そもそも人間の翻訳者であっても、幾度の修正や推敲を重ねて、訳文を練り上げていくのだから、機械が一発で翻訳をできないのは当然の話だ。それでも、納期やコストを重視する実践現場では、機械翻訳を活用できないかという期待がある。せめて、機

械翻訳を下訳として利用したい。そのためには、機械翻訳の品質がどのレベルに達している必要があるのか。筆者が関心のある機械翻訳の「使えるレベル」とは、こういうことだ。ということで、以下では、前編集と後編集とに関連した機械翻訳の翻訳研究の文献をいくつかレビューしていくことにしよう。

Krings (2001)『Reparing Texts』

Krings (2001)は、機械翻訳の後編集プロセスを検証した近年では最も意欲的な研究である。Think Aloud Protocolを用いて、翻訳者の後編集プロセスと機械翻訳を使わない翻訳プロセスとの比較検証を行った。使用した機械翻訳はルールベース型(SystranおよびMetal)で、言語の組合せは英語から仏語であった。

相対的な作業効率(時間)では、普通の翻訳よりも機械翻訳＋後編集の方が20%程度上昇した。興味深いのは、機械翻訳そのままのテキストと後編集後の完成したテキストとの類似度(similarity level)を比較すると、4割弱程であったという報告である。つまりテキストの6割近くが、後編集において変更されたことになる。この実験が行われた10年前の機械翻訳の精度は現在よりも低かったと予想できるので、この修正量は妥当かもしれない。それだとしても、翻訳に要した時間が2割減少したのは、むしろ驚くべき結果であろう。

O'Brien (2006a)『Controlled Language and Post-Editing』

O'Brien(2006a)は、前編集に制限言語(CL)を使用することによって、その後に生成される機械翻訳の結果の後編集で、どの程度の効率化が図れるかを調べた。機械翻訳にかける前に、原文に含まれる文法的曖昧性などを取り除いておけば、機械翻訳の訳出精度が上がり、結果として後編集に要する労力が低減し効率アップにつながると、予想するのは簡単だ。

O'Brienは、この仮説を、時間的(temporal)、技術的(technical)、認知的(cognitive)側面から検証した。IBMのWebsphere(ルールベース型)を使用して、制限言語で書き直した原文（前編集有り）と書き直さない原文（前編集無し）とを機械翻訳にかけ、それぞれの後編集の作業効率を調査した。時間的な処理速度(総ワード数÷所要時間)の比較では、予想通り、前編集した機械翻訳結果を後編集したほうが速かった。ただ、分節(segment)を個別に見た場合、前編集をした方が全ての分節で速かったかと言えば、そうでない箇所も観察された。O'Brienはこの理由を次のように説明する。後編集を行う場合は、単語の位置などを変えるだけで良いことがある。この操作を行うために「カット&ペースト」機能を使えば効率が上がるが、翻訳者（後編集者）の多くは、新たにキーボードから文字入力をしていた。入力作業は、認知的に負荷がからないからなのかもしれないが、このような冗長な技術的作業は、時間的な効率性からは無駄である。全ての分節で時間が短縮できなかった理由を、このような技術的操作が関与していたとした。しかし、原文に対応する訳語をキーボード入力するというプロセスは、ひょっとすると翻訳という基本行為となんらかの関係があるのかもしれないと、筆者は考えている。

さて、最後に、認知的な負荷の問題であるが、通常、翻訳者が問題に直面すると、入力の手を止めて考えたり、調べ物をしたりと、訳出作業が一時中断する。つまり、一時中断(ポーズ)の割合が多ければその分だけ、翻訳者が難問に直面する割合が高くなり、認知的負荷も高くなると言われている(注2)。O'Brienは両方の後編集のケースについて、ポーズの割合を調査したが、違いは全く見られなかった。実験参加者の実験後のコメントの中に、「後編集は、普通に翻訳をするより疲れる」という感想が散見された。Kringsの調査でも指摘されていたことだが、後編集は、原文と訳文を行き来する回数が増えるために、直線的な作業になりづらいらしい。つまり、機械翻訳の下訳の精度が上がったとしても、「後編集」という作業の性質上、原文と訳文と照らし合わせるための認知負荷は、さほど変わらないのかもしれない。

いずれにしても、目に見える結果として、前編集と後編集を組み合わせれば、時間的な作業効率が向上することは、この実験で実証されたといえる。

O'Brien (2006b)『Eye-tracking and translation memory matches』

機械翻訳＋後編集の作業が、実際に翻訳者の認知負荷をどのくらい低減しているかは、時間の計測や技術的なポーズの割合だけからでは不十分であることが分かった。そこで、O'Brien(2006b)では、人間の瞳孔の動きと開き具合を測定できるアイトラッキング装置を用いて、後編集作業の認知負荷を測定し

た。実験は、もともと翻訳メモリにおけるファジーマッチ(Fuzzy Match)のマッチ率と瞳孔の開き具合との相関を調査する目的で行われたのだが、メモリ内に機械翻訳の訳文も混ぜて行っていたのが、この研究のユニークな点であった。

結果は、大方の予想通り、翻訳メモリの70%ー100%マッチ前後までは、マッチ率に従って瞳孔拡張は減少し続けた。またノーマッチ(No Match)で瞳孔拡張は最大になった。つまり、ゼロからの翻訳（ノーマッチ状態）では翻訳者の認知負荷が最も大きくなり、近似箇所を修正するだけの作業（ファジーマッチ状態）では、認知負荷も小さくなることが証明された。

この結果は想定内なのだが、特筆すべきは、機械翻訳の後編集の作業における認知負荷が、予想以上に低かったという結果である。機械翻訳の修正作業（後編集）では、瞳孔拡張は、85ー90%ファジーマッチとほぼ同等だったのだ。翻訳メモリを使ったことのある方なら想像できるだろうが、85%マッチの場合は、大抵、1つか2つの単語を入替える程度の修正作業でしかない。非常に単純な作業なので、認知的負荷が低いのは頷ける。驚きは、これが機械翻訳の後編集でも同じだということだ。高い訳出精度を、機械翻訳が達成しているということである。この実験で使用された言語ペアは、英語→仏語／独語であった。英語→日本語ならば、まだこのレベルにはならないだろう。

Guerberof(2009)『Productivity and quality in the post-editing of outputs from translation memories and machine translation』

上記の結果を受けてGuerberof(2009)は、統計的機械翻訳(SMT)を使った英語→西語での、後編集の作業時間と品質に関する追試を行っている。彼女の実験も、翻訳メモリのファジーマッチとSMTの訳文をメモリ内に混在させて比較検証を行った。結果は、機械翻訳を修正する場合の方が、翻訳メモリのファジーマッチを修正するよりも、時間と品質ともに優位であった。

この理由として、翻訳メモリの修正の場合は、（人間の）翻訳者の訳文が近似文（下訳）として表示されるため、文章がこなれていて自然であるために、差分箇所を見つけ出すのに時間が掛かってしまうというものであった。また品質（この場合は、誤訳や訳漏れがないという基準を用いた）についても、翻訳メモリの文章がこなれているために、訳抜けがあったとしても、見逃してしまうことがあると指摘された。これに対して機械翻訳の訳文は、ぎこちない直訳が多いので、原文と訳文の一対一対応が比較的容易になり、品質的にも有利になるというものであった。

機械翻訳＋後編集と、ゼロからの翻訳（ノーマッチ）との品質の比較では、僅かながらゼロからの翻訳が優勢であったものの、所要時間とのバランスを考慮した総合的評価では、機械翻訳＋後編集に軍配が上がる。つまり、英語→西語での翻訳は（分野が制限されるという条件はつくものの）もはやゼロから翻訳するよりも、そして翻訳メモリを使うよりも、機械翻訳＋後編集が一番良いということが言えるのだ。

実は、Guerberofの研究の動機は、翻訳者へのワード単価をいくらに設定すべきか悩んでいたことに端を発する。というのも、すでに彼女が働く翻訳会社では機械翻訳を導入しており、この実験のように後編集の作業だけを翻訳者に発注していたからだ。もしも、このGuerberof研究結果とO'Brien(2006b)の結果が採用されることになれば、機械翻訳＋後編集の作業は、翻訳メモリ90%マッチと同じ単価、すなわち、通常のノーマッチの4分の1程の値段になってしまう。実際の効率はここまで向上はしていないので、この数字が額面通り使われることはないとしても、翻訳業界の横行する単価の値崩れは、この方面からも押し寄せていることを、改めて実感させられた研究結果である。

Bowker & Ehgoetz (2007)『Exploring user acceptance of machine translation output: A recipient evaluation』

翻訳の品質の評価は難しい問題だ。品質の定義の仕方しだいでは、作業効率も変わってくるからだ。Bowker & Ehgoetz(2007)の研究では、この品質をユニークかつ現実的に扱い、機械翻訳の検証を行った。

翻訳の品質は、Skopos（翻訳の目的）によっても左右されると考えられるが(Vermeer, 1989/2000等参照)、Chesterman & Wagner (2002:80)は、翻訳を「サービス（業）」と捉え、その品質を測るには顧客の満足度を調べるのも一つの方法になりうる、と提案している。これは、受容者評価(recipient

evaluation)と言われ(Trujillo, 1999)、Bowker & Ehgoetzは、実務で重きの置かれる3要素＝CQD（コスト、品質、納期）と関連づけて翻訳の品質を評価した。

大学の事務関連業務で発生する文書の翻訳を検証対象とした。大学や企業のように予算と時間の限られた状況では、翻訳の需要があっても、その全てを外注できない。そこで安価でスピーディーな機械翻訳＋後編集を利用できないか、調査するのがこの研究の目的であった。

同じ原文に対して3種類の訳出物を用意し、翻訳のユーザーとなる大学教授に対してアンケートを実施した。3種類の翻訳とは、(1)翻訳者がゼロから翻訳したもの、(2)機械翻訳＋後編集したもの、(3)機械翻訳のみを行ったもの、である。品質の順位は、当然、(1)>(2)>(3)の順になる。しかし、これにコストと納期の条件を加える。(1)が一番高価で納期も長い。これに対して(2)は、(1)の5ー10分の1程度。(3) は更に少なく100分の1程に設定した。数字の割合は実務の予想工数に基づいている。この条件において、ユーザーはどれを選択するのかが焦点だ。

結果は、(1)を選んだのが全体の32.3%、(2)が67.7%、(3)を選んだ人は誰もいなかった。つまり、使用目的が限定された翻訳であれば、7割弱の人は機械翻訳＋後編集の品質レベルで満足できるという。逆に、機械翻訳そのままでは、いくら安価かつ短納期であっても、実用レベルに達しないということである。また、(1)を選んだ3割の人は、人間の翻訳者による翻訳を必要としていたわけだが、この中には文学部や外国部学部など言語に関わる学部の教授らが多く含まれていたこともあり、言葉・言語に対する意識の違いが結果に反映されていたと、Bowkerらは分析する。

この調査で実施された後編集はRapid post-editingなので、通常のFull post-editingよりも品質は落ちていたにもかかわらず、条件次第では実用化レベルになるというのは、非常に興味深い結果である。

Garcia (2010)『Is machine translation ready yet?』

これまでの実証研究は、英語とヨーロッパ言語の組合せであったが、Garcia(2010)は英語→中国語での検証を行った。時間と品質について、機械翻訳+後編集とゼロからの翻訳とを比較した。品質基準にはNAATIの試験基準を使用した。

結果は、機械翻訳＋後編集もゼロからの翻訳も、どちらも時間、品質ともにほとんど変わりがなかった。これはまだアジア言語での機械翻訳の精度が、ヨーロッパ言語との組合せよりは、劣っているということを暗示しているのかもしれないが、仮にそうだとしても、機械翻訳を使うことが決してマイナスに働くことのないレベルまでは近づいているとも解釈することができる。

この研究の特徴は、実験にGoogle翻訳者ツールキットという環境を使った点にあった。Garciaが指摘するように、翻訳支援ツールの歴史は翻訳メモリの単体使用から機械翻訳との融合というように変容してきた。Googleが用意する翻訳者ツールキットでは、機械翻訳に主眼をおき、翻訳メモリは副次的にしか機能しない。また、このようなツールを使うことが、翻訳者の翻訳への考え方にも影響を与えている。

実験参加者に対して行った調査では、「Google翻訳者ツールキットを使った翻訳のほうが、使わないよりも翻訳しやすい」という意見が、実験後には増えていた。興味深いのは、そういった意見と実際のデータとが相関しており、ツールを好むと述べた翻訳者の訳出物の品質は、ツールを使わなかった時の品質よりも優れていた点である。それでも、中には「ツールを使わないほうが良い」と回答した翻訳者もいるのだが、この場合は、その翻訳者の翻訳品質は、ツールを使うと悪くなっていた。

テクノロジーに対する向き不向きはあるにせよ、全体としては、機械翻訳の活用を前向きに受け入れる翻訳者の数が上回っており、機械翻訳に敵対心を抱いていないというのは、翻訳の未来を考えるうえで何かヒントを与えてくれそうな結果だと思う。

以上、まばらではあるが、機械翻訳＋後（前）編集に関する文献を見てきた。機械翻訳に消極的な印象しか持っていなかった読者にとっては、すこし過激だったかもしれない。しかし機械翻訳が、実用化の域に達してきているということが、多少はご理解いただけただろう。日本語での調査結果については、またどこか別の機会で執筆できればと思う。このよ

うな現実を踏まえ、翻訳者として何をすべきなのか、その未来を改めて考えてみるのも良いだろう。

【注】

(注1) https://www.tausdata.org/
(注2)関連研究多数。Immonen(2006)等を参照のこと。

【参考文献】

Allen, J. (2003). Post-editing, in H.Somers (Ed.) *Computers and translation: A Translator's guide*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins, 297-317.

Bowker, L, and Ehgoetz, M. (2007). Exploring user acceptance of machine translation output: A recipient evaluation. In D. Kenny and K. Ryou (Eds.) *Across Boundaries: International Perspectives on Translation*. Newcastle-upon-Tyne: Cambridge Scholars Publishing. 209–224.

Chesterman, A. and E. Wagner. (2002). *Can Theory Help Translators? A Dialogue Between the Ivory Tower and the Wordface*. Manchester: St. Jerome Publishing.

Garcia, I. (2010). Is machine translation ready yet? *Target,* 22(1). 7-21.

Guerberof, A. (2009.) Productivity and quality in the post-editing of outputs from translation memories and machine translation. *Localisation Focus,* 7(1). 11–21.

Immonen, S. (2006). Translation as a writing process: Pauses in translation versus monolingual text production. *Target*, 18(2), 313-335.

Krings, H. (2001). Repairing texts: Empirical investigations of machine translation post-editing processes. G. S. Koby, ed. Ohio, Kent State University Press.

NIST. (2006). "NIST 2006 Machine translation evaluation results" (2006 年 11 月 1 日). 2010 年 8 月 19 日 http://www.itl.nist.gov/iad/mig//tests/mt/2006/doc/mt06eval_official_results.html より情報取得.

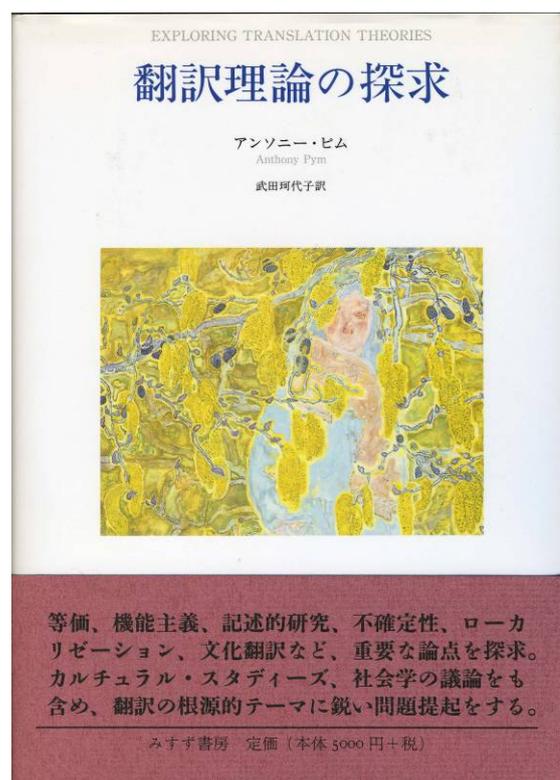
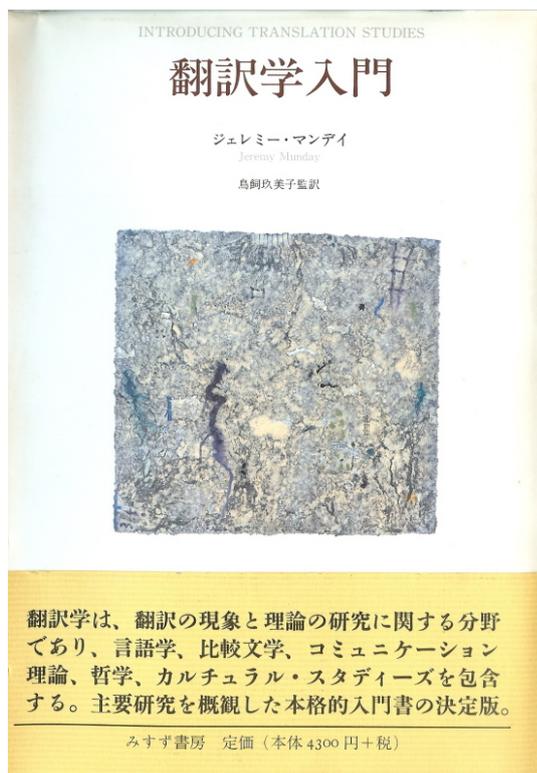
O'Brien, S. (2006a). Controlled language and post-editing. *MultiLingual*, October/November 17-19. (https://216.18.156.115/multiligual/downloads/screenSupp83.pdf)

O'Brien, S. (2006b). Eye-tracking and translation memory matches. *Perspectives: Studies in translatology*, 14 (3). 185-205.

Trujillo, A. (1999) Translation Engines: Techniques for Machine Translation, London: Springer.

Vermeer, H. J. (1989/2000). Skopos and commission in translational action. In L. Venuti (Ed.), *Translation studies reader* (pp. 227-38). London: Routledge.

宮平 知博・田添 英一・武田 浩一・渡辺 日出雄・神山 淑朗 (2000)・『インターネット機械翻訳の世界』早稲田教育叢書.

※マンデイ著（鳥飼玖美子監訳）『翻訳学入門』やピム著（武田珂代子訳）『飜訳理論の探求』にも翻訳関連テクノロジーの記載があるのでご参照ください。

びりっかすの子猫からハワーズ・エンドまで

小学校にはいって、最初に父が買ってきた本は、『びりっかすの子ねこ』（ディヤング作、中村妙子訳、偕成社）だった。「こどものとも」とは違って、表紙が厚くて字の多い本だった。えんぴつみたいなしっぽをぴんと立てて、おかあさんねこのあとを歩いてゆく黒い子ねこたちの絵や、寒くて孤独な夜の冒険と、そのあとに子ねこを待っていた、ミルクと年より犬と人間の温かさは、40 年以上の歳月を経ていまだに鮮やかにわたしの脳裏によみがえる。寒さに震える子猫を追っ払うのも人間の手なら、温かい家とミルクと友達を与えることができるのも人間なのだと、たぶん 6 歳の少女はそのときに学んだのだろう。そしてこのとき一冊の本に「さく」「やく」「え」を受け持つ人々がいるらしい、ということも初めて意識したのではなかったか。

本の主たる供給元は父親で、岩波少年文庫（当時はまだハードカバーで箱にはいっていた）、学研版新しい世界の童話シリーズ、学研少年少女新しい世界の文学シリーズ、講談社世界の名作図書館、大日本図書のこども図書館シリーズなどを折々、黒い鞄にいれて持って帰ってきた。当時の本はどれも立派で、父の書棚も筑摩の文学全集や中央公論の世界の歴史・日本の歴史全集などがぎっしり並んでいた。そういう時代だったのだ。岩波少年文庫やこども図書館シリーズには井伏鱒二や宮沢賢治の作品もあったのだが、今改めて顧みればわたしがくりかえし愛読したものは翻訳文学のほうに数多い。ごんぎつねや、赤いろうそくと人魚、泣いたあかおになどの日本の童話は、なんだかあまりに哀切で、それよりはからすのアブラクサスとほうきにのって市場にでかける小さな魔女や、おとなたちに一杯食わせることをもくろむ二人のロッテや、ロシアの森の 12 の月の精と遊んでいるほうがわたしには楽しかった。あるいは、池澤夏樹が記すように「追われる立場で動物としての知恵をしぼって相手を撒くこと、いやもっと危なくぎりぎりまで追いすがられて自分の脚力だけを頼りにからくも逃げ切ること（中略）にさえ、大いなる喜びがこめられているのかもしれない。そういう時にこそ弱い動物は自分が生きているという実感を改めて感じて幸福感を味わう」（「ぼくらの中の動物たち」）姿を見せるギザ耳や、狼王ロボやハイイログマの「生の実感」を分かち合うほうが楽しかった。幸福な少女の毎日を彩ったさまざまな翻訳児童文学は、たぶん可視的にも不可視的にも、その後の人生に影響を与えている。

メアリー・ポピンズもそういったもっとも印象に残る作品の一つである。彼女は中世の住人や魔女といった全く異なる世界の人ではない、触れれば骨張った手足が感じられるほどの距離にいる人でありながら、異界へのポートを持つ女性である。児童文学でありながら、主人公は子供（だけ）ではなくて大人であるというのが、この作品の不思議さの一つである。小学校 3 年生の時に、「好きなお話を絵に描く」時間があった。わたしは「あべこべトーフィーさんのところのお茶会」の様子を描いたのだが、側にいた級友が「これは何の話？　どっちが悪者？」と尋ねたのでたいそう驚いた。しかしそのとき「メアリー・ポピンズ」を知っている級友はひとりもおらず、わたしが「何を描いているのか」は誰にも理解されなかった。杖を持った魔法使いでもなく家政婦でもなく、しかも時におっかない人で、さらにバルタン星人も鉄人 28 号も出てこないのになぜ面白いのか、というのを小学生に納得させるのはひじょうに難しかったのである。

ロンドンの広大な公園やジンジャーパンやガイ・フォークス・デイといったものに、親近感と憧れを感じていた小学生が愛したメアリー・ポピンズが話す言葉、彼女を語る言葉、あるいは公園番やロバートソン・アイの語る言葉は林容吉氏の日本語であった。P.L.トラヴァースの世界と林容吉の日本語があまりにも分かちがたく結びついてしまった結果、中学 3 年生のときに赤い本におさめられた、メアリー・ポピンズの何話かを英語で読んだときには、林容吉の訳が自ずと和訳にあらわれてしまい、「それでは努力して英語を読んでいないので勉強になっていません」と先生に言われてがっかりするという事態にも及んだ。

明治の翻訳語が近代日本人の語彙を増やし、思考の礎となった。一世紀を経て、林容吉氏によって伝達されたメアリー・ポピンズの言葉や、石井桃子、大塚勇三、阿部知二、松野正子といった人々に案内された世界のありようとその言葉が、一人の小学生の根となった。美智子皇后が、1998 年の国際児童図書評議会の講演で、読書は自分に根っこと翼をあたえてくれた、と述べておられる。わたしの根のうちでも最も太いものは、翻訳文学の日本語でできているといえるかもしれない。『びりっかすの子ねこ』と出会って 40 余年。現在わたしは神戸女学院大学の院生として翻訳研究をし、ハードカバーの手触りを懐かしみながら河出書房新社の世界文学全集を読んでいる。

法政大学出版局広告（続き）

［版元より］このたび、近代日本の〈翻訳〉をめぐる画期的な基本書『日本の翻訳論――アンソロジーと解題』を刊行いたします。9月10日の発売予定です。ご予約・ご注文を承っております。

大学における翻訳授業を振り返る

白川　貴子

1.　はじめに

初めての訳書が刊行されたのはおよそ 10 年前、それから毎年数点ずつ、英語またはスペイン語で書籍の翻訳に携わってきた。ノンフィクションでは堅い内容のものから一般向けの柔らかいもの、フィクションは文芸作品、短編集やミステリーなど、いろいろなジャンルを手がけてきたが、翻訳作業は相変わらずたいへんで奥が深い。

今年は 4 月から獨協大学で翻訳の授業を担当し、全 14 回の講義を終えて一区切りがついたところである。翻訳の指導方法はいろいろあると思うが、このクラスでは実践の現場で経験してきた翻訳を中心に、先ずは翻訳の心構えを身につけてもらうことを目標とした。翻訳を学ぶのは初めてという学生が大多数だったせいか、最後に提出させたレポートの先入観にとらわれない素直な感想や意見には、教師としての筆者も大いに刺激を受けた。そこで、この紙面をお借りしてその内容をご紹介したいと思う。授業内容については反省すべき点も多いが、今後の翻訳と翻訳教育を考えるためのご参考になれば幸いである。

2.　翻訳クラスの学生による期末レポート（学生番号順に一部を抜粋。引用箇所は原文のまま）

提出を課したレポートは、翻訳の授業で学んだことを踏まえ、

① 翻訳にあたって大切と思うこと
② 翻訳をするために、今の自分にとって必要と思うこと
③ 理想の翻訳とは

を、A4 サイズのレポート用紙 3 枚以内にまとめるように指示をした。

学生 A（3 年生、女性、英語学科異文化コミュニケーション専攻）

・ 今まで翻訳にあたって大切なことは、どれだけ正確に間違いなく作者の言うことをそのまま相手に伝えられるかということだと思っていました。しかし、（中略）作者の言わんとすることをしっかりと理解したうえで、自分なりに、自分なりの言葉で訳すことが大切なのではないかと思う。というのも、翻訳時点で、原作があったとしても、それとは違う新しい本が生まれるのだと考えるようになったからであります。同じ文章でも、訳す人によって訳し方も変わって様々で、一語一句にとらわれるのではなく、自分の翻訳した本をどういった人に読んでもらいたいのか対象者をしっかりと定めて、そこにいかに自分なりに、自分の個性を出し、いかに伝えやすくするかが必要だと思うようになりました。
・ きっちりとした英語の基礎力が、翻訳には不可欠だと思います。それを身につけた上で必要なことは、いかに多くの本に触れるか、これにつきると思います。
・ 私の理想の翻訳は、原本作者の言いたいことを、伝えたいことを、細かなニュアンスを正確に読みぬき、それをまた、自分らしく自分の言葉で翻訳することであります。（中略）私は、どんなに難しい内容であっても、誰にとっても親しみやすい翻訳がしたいです。

学生 B（3 年生、女性、英語学科異文化コミュニケーション専攻）

・ 授業中に『山の音』やレポーターの英文〔注 筆者の訳書を使用〕を実際に訳してみて、原文の一番言いたい部分を自然な日本語で表現することが一番大切であると感じました。そのためには英語の文法や単語を知っていることは勿論ですが、日本語の表現力も大切なのではないかと思います。
・ 私が一番感じたことは、自分の英語・日本語力の乏しさでした。（中略）私は翻訳するのに十分な語学力や文章力や知識、そして他人に分かる言葉で伝えようとする意識が足りなかったのではないかと感じています。
・ 理想の翻訳は、『日本文の語句の exact English equivalent を見つけ出し、それを原文の意味の重点が移動せぬよう配置し、しかも原文の情緒や雰囲気を、全体の調子で再現し得るよう努力する、すなわち原文と均質な訳文をつくる』こと。〔注 参考に配布した資料の佐々木高次著『和文英訳の修行』からの引用。〕

学生 C（3 年生、男性、英語学科言語専攻）

・ 翻訳においては双方の言語に精通していることは必ず必要である。また翻訳にはこの他にもさまざまな知識が必要である。それは翻訳を行う言語の文化的背景や習慣、その国の常識や自分が翻訳する文章が書いてある内容の専門的知識（もしビジネス関連であるなら英語圏のビジネスの方式と日本のビジネスの方式の違い）である。
・ 翻訳のために自分に必要だと思うことは、英語と日本語の言語知識である。英語だけでなく日本語の知識もまだまだ足りていない。さらに英語圏

の文化や習慣、常識などを身につけていけることが理想である。（中略）翻訳をするにあたって今の自分の能力、知識で十分だと言える能力は何一つないと思う。
・ 自分の思う理想の翻訳とは、原文の細かなニュアンスまでもうまく表現できることである。（中略）その国の文化的背景や知識などもできる限り汲み取ってそれをできるだけ原文が壊れないように翻訳した文章の中に入れていくことができればさらにすばらしい翻訳だと思う。

学生 D（３年生、男性、英語学科文学専攻）
・ 翻訳にあたって大切と思うことは自然な日本語に訳すことである。やはり英語を日本語に訳す時、だいたいは直訳になってしまう。（中略）その語彙の意味、ニュアンスを深く理解することで正確に訳すことができる。だが、これは簡単なことではない。書き手の訳し方によってその訳された作品が固いものになったり柔らかいものになったりする。語彙、文章の並び、そして作品の理解が翻訳にあたって大切なことではないでしょうか。
・ 翻訳のために今の自分に必要と思うことは、やはり英語の文章に触れる機会を増やすことだと思います。しかし、的確なわかりやすい日本語に訳すためには日本語の本もある程度は読まないといけないと思いました。正しい日本語と正しい英語を両方理解しないといけない。でなければちんぷんかんぷんな訳になってしまい、直訳になってしまう。（中略）分からない単語にあたったとしても英和辞書に頼るのでなく、ちゃんと英英辞書を引いて英語の理解をきちんと深めたい。（中略）意外だと思ったのは同じ英文学作品でも人によってとても自由活発に訳されていることだ。なるほど、人の心に訴えかけ、ハートフルな訳を作り出すのには、想像力が豊かでないといけないのかもしれない。翻訳に答えなどない。それ故に自分にとって上述したことが必要なのかもしれない。（中略）英語を話さない日本人にとって英文学作品は訳者によって最終的に生き返るのである。

学生 E（3 年生、男性、英語学科国際コミュニケーション専攻）
・ 英文の意味がわかることと、きれいな日本語訳が作れるのとでは全く違うのだということに気づかされた。（中略）日本語は古文の時代から主語を省略する癖があり、何度も同じ主語で「～が（は）」と繰り返して書くと稚拙な印象になってしまう。そこに自分で創意工夫が必要だった。また一文が様々な修飾語で長くなっている文章はどのようにして日本語に直していけばいいかに頭を悩まされた。英語では一文でも、日本語ではある程度句点で切って複文にする方が読みやすいのではといろいろ考えた。
・ 翻訳には正解がない。訳し方は人それぞれである。（中略）原著は一つなのに訳本が複数あり、その中で好きな訳と嫌いな訳があるというのはとても不思議なことである。翻訳において大切なことはここにあると思う。つまり、原著の内容を十分に網羅しつつ、多くの読者に好かれる訳をすることである。翻訳の本質はここにあると思う。
・ 文の英文和訳に関する力不足を感じた。（中略）むしろ、英文和訳において大切なのは日本語力なのだなとつくづく感じた。（中略）英語をきれいな日本語に直すことは難しい。原因をさかのぼれば中学一年生の初めて習う英語の授業に起因してくると思う。（中略）「これはボールですか」「いいえ、これはりんごです」なんて笑ってしまう会話もあったりした。英語をひたすら直訳に直し、単語ごとに意味を区切って日本語でつなぎ合わせる作業を中学から高校にかけてしてきたため、英語を自然な日本語に直すという練習が出来てこなかった。もちろん言語習得の初期の段階では外国語を母語で訳す際は直訳の方が効率は良いだろう。ただ、それだけでは翻訳の目指す日本語訳は出来ない。翻訳を目指すには英語の学習だけではなくそれ相応の勉強が必要なのだなと思った。
・ 原著は一つであってもその訳書は翻訳者の数だけある。（中略）どれが良くて、どれが間違っているというのはある一定以上をいけば後は主観の問題で、ようはどれが自分の好みに合うかというところに収斂していくのだと思う。ある一定という境界線は書く文章の意味を訳者がきちんとおさえているかどうかという問題であって、プロの訳者としては当たり前のことに過ぎない。そこから先の頭にある物語をどう日本語に置き換えるかがプロの翻訳者の腕の見せ所なのだと思う。その中で多くの読者の支持を得られたものこそが理想の翻訳であると思う。
・ 昔から英語を好きになってどんどんと勉強するようになった高校生の頃、訳本を読むことに抵抗を覚えるようになってきた。それは本物ではなく偽物を、オリジナルではなくコピーを見ているような感覚があったからである。しかし、今はそれでよいと思えるようになった。訳本は翻訳者の頭を通した一つの作品であり、それらの中から自分の好きなものを選ぶのも文学などを楽しむ上での一つの楽しみ方なのではないかなと思いました。

学生 F（3 年生、女性、英語学科言語専攻）
・ 翻訳をする際には言語的知識だけでなくそれぞれの国について知っていることが大切なので、各国の文化についての知識が必要だと思う。（中略）また、翻訳をする時に、外国語を学ぶことに集中しがちだが、外国語だけでなく、正しい日本語表現や日本文の読解力などを身につけることも大切だと思うので、日本語についても勉強するべきだと思う。
・ 原文を忠実に再現できることが理想の翻訳だと思う。“忠実に”というのがすごく難しいところ

だと思うが、（中略）単語によって意味はさまざまだろうし、同じ意味でもさまざまな言い方があるだろうし（中略）、「アメリカ人が書いているから、こういう表現だ。それを日本人が書くとこういう表現になる」というように翻訳する国の人になりきれるくらい、表現の仕方などを把握していると原文と同じものができるのではないかと思う。

学生G（3年生、女性、英語学科文学・文化専攻）

- 私が大切だと思う事は、まず一つ目に、読み手のことをよく考えるということである。（中略）二つ目に、原文の特徴を生かした訳にしなければならない。特にフィクションなどは、物語の雰囲気であったり、言葉の言い回しであったりが大きな魅力の一つであるため、訳した時にその魅力が損なわれてしまわないよう注意が必要である。
- 私が理想とする翻訳とは、「原文の持ち味を生かした翻訳」である。ただ単に物語の内容が伝われば良いというものではなく、原文を読んだ時と日本語訳を読んだ時に、読み手が同じ印象を感じられる訳になっている事が理想で、例えば原文で読んだ時にはこの場面は温かい印象を受けたのに、日本語で読むと冷たい印象を受ける文章になっている、などと言う事があると、本の作者が意図した「作品」が訳された本を読んだ者には伝わっていないという事になってしまう。原文を訳す際にしっかりと作品を理解し、作品に含まれている感情や情景を一つ一つ正確に作者の意図どおりに描写していけるようにしたい。
- 翻訳をするために今の自分に必要だと思うことは、もちろん単語の勉強、文法の勉強などの日々の基礎的な学習に加え、様々な本を読んで翻訳のセンスを磨いていくという事だ。（中略）そしていろいろな国の土地や気候であったり文化であったり、生活様式であったりといった情報を知る必要もある。例えばアメリカの田舎について描写されている文を読んだ際に、アメリカの田舎がどのようなものなのかという予備知識がなければそれを思い描く事が出来ず、なぜ作者が舞台にアメリカの田舎を選んだのかなどという事も理解できない。そしていろいろな文章を何度も何度も自分なりに訳してみるという実践も必要である。（中略）個人の感覚に偏ってしまわずなるべくいろいろな人からの意見があると、更に良い。

学生 H（3 年生、女性、英語学科国際コミュニケーション専攻）

- よい翻訳者というのは翻訳作業を終えた後必ず、自分の翻訳に落ち度がないか確認するのではないだろうか。常に自分の翻訳を客観視できる目を持つというのはとても大切であり、自分以外の他者の存在を常に意識することは、翻訳には非常に大切だと思う。
- 私に必要だと思うことは、文章力の向上である。（中略）そこで、どうすれば文章力が向上できるか考えてみた。第 1 に優れた文章で書かれた書物を沢山読むことである。（中略）第 2 にまめに文章を書く機会を持つことである。（中略）また、文章の繋がり具合を常に意識したい。他人の文章を読むときも、自分自身の書いた文章を読むときもその繋がり具合に主語と述語がうまく繋がっているかどうか、助詞の使い方が適切かどうか、常に目を光らせたい。日々これを実践するのとしないのでは長い目で見れば、大きな差が生じてくるのではないだろうか。私は筋道の通った文章を書くにはこれらが不可欠であると考える。
- 私が思う理想の翻訳は、「読みやすい翻訳」である。しかし、「読みやすい翻訳」を文字通りに受け止めると、幼稚な日本語で書かれている方がいいということになりかねない。原文の味わいや微妙なニュアンスをすべて取り去り、理解が難しい部分をはしょって簡単にすれば、たしかに文字通りの意味での「読みやすい」文章になるがそれは理想の翻訳とは言えない。
- 英文和訳型の翻訳は原文に忠実な翻訳を目指していた。だが、原文そのものに忠実に訳そうとしたのではない。原文の構文と単語の訳し方として英文和訳で教えられている方法を忠実に守って訳そうとしたのだ。その結果、英文和訳型の翻訳では、原文に忠実といいながら、原文とは似ても似つかぬ訳文ができるのが普通だ。つまり、原文に忠実に訳すという目的を達成できないのである。問題はここにあるのであって、原文に忠実に訳すという目的にはない。「原文に忠実に訳す」というのは、いってみれば同義反復である。訳すという以上、原文に忠実でなければならない。これに対して「読みやすい翻訳」は、自己矛盾に陥りかねない。文字通りの「読みやすさ」を追求すれば、一部の例外を除いて、翻訳ではなくなる可能性がある。「読みやすい翻案」になりかねない。だから、「読みやすい翻訳」に代わるものとして、新しい言葉が必要なのだと思う。そのような観点から、理想の翻訳とは、「読みやすい翻訳」にかわり、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだろうと思える翻訳」であるのではないだろうか。

学生 I （3 年生、女性、英語学科国際コミュニケーション専攻）

- 翻訳にあたって大切だと思うことは、もちろん正しく訳すことだと思います。しかし、正しく訳すとは、ただ直訳するというわけではありません。正しく訳すにあたって、前後のつながりをよく考えたり、その文を作った著者の背景、意図などを読み取ったりして訳すことが重要だと思います。それを可能にするには、やはり言語能力は大前提です。しかし、言語能力だけでは、翻訳するのに限界があります。それには知識が必要です。むしろ、知識である程度の言語能力はカバーできると思います。簡単なようですがこの知識とは、とて

も大事なことだと思います。本などを翻訳する時はその本の著者のことや内容などの基礎知識は最低押さえておかないといい訳はできないと思います。正しく翻訳し、そしてその次に重要なことは相手にわかりやすく伝えるということだと思います。

・ 翻訳のために今の自分に必要だと思うことは、まず英語の単語や文法を正確に理解することだと思います。

・ 理想の翻訳とは、その著者の意図していることを正しく、そして相手にわかりやすく訳すことだと思います。しかし、私が思うに 100 パーセント正しい翻訳はないと思います。いくらその著者になりきって訳したにしても、やはり微妙なニュアンスの違いは出てくると思います。その微妙なニュアンスを理解できるのは、その張本人だけだと思います。ただ、その著者の微妙なニュアンスに近づくことは可能だと思います。そのためにその著者のことはもちろん、その本の研究は重要だと思います。そうすれば、理想の翻訳に近づけると私は思います。

学生 J（3 年生、女性、英語学科国際コミュニケーション専攻）

・ 英単語は一つ一つ日本語に訳すことができ、ある単語一語だけならば意味を理解することができるが、前後のつながりを考えることなく訳してしまうと支離滅裂な文章が出来上がってしまう。（中略）通訳と違って即座に英語から日本語に直すわけでなく熟考するものでもあるのでもっとも適したフレーズを作り出すことが重要である。またいくら英語が得意で外国人とコミュニケーションがうまく取れたとしても翻訳後の言語（私の場合は日本語）に長けていなければ翻訳は成立しない。（中略）いくら全世界で大人気著書であっても訳語によって世界観が大きく異なる。翻訳には英語を極めるだけでなく、日本語も研究する必要があると思う。

・ 普段からあまり書物を読むことがなく、いわゆる活字離れしているのでまずは日本語で書かれた小説、評論、自伝などを読み日本語の表現を身につけることから始めなければならないと思う。

・ 私にとって理想の翻訳とは人を引き付けることのできる文章を作ることである。（中略）逆に大胆な表現を使っていても人の心を打つことのできない文章はたくさんある。人はみな違う個性をもっているのだからその翻訳者にしか伝えることのできない自分にあった表現や空気感を文章を通して伝えれば良いと思う。

学生 K（3 年生、男性、英語学科国際コミュニケーション専攻）

・ 翻訳にあたり大切なのは、原文の中身を正確に訳すこと。しかし、それでは直訳と紙一重になってしまう。そこで大切なのは、これは日本語母語話者の場合だが、日本語で書かれている本、特に日本で名作とされている書物を古今問わずたくさん読み、日本語の表現力を養うことが大切だと思う。

・ 翻訳において必要な英語力とは、特にいわゆる input の力である。したがって私はまず、人様に読んでもらうことよりも、誰かに伝えられなくても良いから、自分でしっかりと理解できる力が必要だと感じる。

・ 「理想の翻訳」とは、何も原文の良さを再現するものではなく、「原作の作者がこの言語の母語話者（日本語なら日本人）だったらどういう表現をするだろうか」という疑問を常に持ち続けながら翻訳された文章こそが、「理想の翻訳」の姿になると思う。しかし、そうだとしたらそのためにはその筆者自身に直接何度も会って、その人の思想や今までの人生経験などの背景を知る必要があるだろう。「理想」なだけに、これは容易に成せることではないのだろう。

学生 L（3 年生、女性、英語学科言語専攻）

・ 翻訳行為において、いかなる難解な言語であろうと、訳者が翻訳作業を繰り返し、諦めずに翻訳に取り組む姿勢を貫くことが、翻訳にあたって大切であると考える。

・ 翻訳者は、外国の知識、つまりまだ日本にはもたらされていない未曾有の知識を、翻訳を担当することで、一番初めに知ることができる。これは一種の優越感のようなものであり、その知識に関しては一番の研究者になれるのである。このことから、翻訳者は絶えず新しい知識を求め続ける追求者であることが望ましいと考える。

・ 授業で「不思議議の国のアリス」の文章の翻訳を学んだとき、実に多くの翻訳者が作り出した様々な翻訳書が存在するのに驚いた。調べてみると、（中略）一つの文学作品がなぜあんなにもおびただしい数の翻訳書として長年出版され続けているのか不思議に思った。しかし、「アリス」の翻訳書には一冊として完全に他の翻訳書と同じ文章はないし、翻訳者が定めた対象読者層が違う点を考えると、この膨大な翻訳書にも納得できる。なぜなら翻訳文学の面白さは、その翻訳者の選んだ日本語の面白さを指すからである。（中略）原文を生かすのも殺すのも翻訳者の日本語である。したがって、翻訳された文章には翻訳者の文章の癖や文体が反映され易いのである。作者側からしてみれば自分の作品が壊されるという心配な点であるかもしれないが、翻訳者の翻訳フィルターを通過することで、その異国の作品が日本で受け入れられ易く生まれ変わると考えれば良いのではないだろうか。結局は、作者は翻訳者を信頼するしかないのであるが、翻訳者は翻訳を受け持つ作品を深く理解し、尊重すべきものは翻訳作品にきちんと残して、慎重に翻訳することが大切であると考える。作品を理解する力は、翻訳者に要求される最

大の力であり、翻訳にあたって最も大切なことであると考える。
- 今の自分には、文章を直訳してしまう癖がなかなか抜けていないと感じる。（中略）その理由を考えてみると、受験英語の影響が大きいのではないだろうか。そもそも私の中に、受験英語は正確に訳出しなければ間違いであるというステレオタイプがあり、一語一句それこそカンマの位置やコロンの数も漏らさないように、忠実に文章を訳す行為に慣れてしまった癖があると思わずにはいられない。（中略）物語や詩、文芸などには受験英語は通用しないと感じる。そのことから、受験英語からもう一歩踏み出した、「翻訳のための英語運用能力」を身につける必要があると感じる。
- 色々な人からの視点で自分の翻訳作品を評価してもらうことは、自分にはできない表現や日本語の面白さを発見できる貴重な行為であると実感した。
- また、私は翻訳は理論的には限界があるが、翻訳行為（翻訳技術）には限界がないと授業を通じて学んだ。例えば、「パンダの食事は？」「パンだ」。のように日本語はダジャレが好きである。これは一つの形式（音声・文字）が二つの実体を示しているが、翻訳・通訳においては二つの実体のうち一つしか保持できない。しかし、訳せないものを訳す工夫がある。それは学術用語など一義定義があるものに等価置き換えたり、理解されにくい文章には注をつけるなどの補足説明をしたり、同様・類似の連想を喚起する記号表現を充当しながら変容適合したり、近接する意味を持つ語句で類似代用したりすることなどが挙げられる。（中略）先人の翻訳家たちは、どんなに不可能な翻訳であろうと翻訳行為を可能にしてきた。私達も翻訳行為を追及していけば、理想の翻訳へ一歩ずつ近づけるのではないだろうか。私も翻訳行為を極めていきたいと思う。

学生 M（3 年生、男性、英語学科国際コミュニケーション専攻）
- まず、知識が大切だと思いました。例えば、クライスデールという馬について、それが、北海道の牧場にいそうな、ただの馬なんだ、とぼんやり想像するよりも、体重が九百キロもある、すきを引くような、とてつもなく大きくたくましい馬をしっかりと想像できるということは、There I was, tiny Connie, surrounded by bulking horses. の一文を考える上で、大きく差が出てきてしまうことだと思います。「テキストの文だけを追っていては全く理解できないのに訳せてしまう。しかし、どこかその訳は薄っぺらいものだ」ということになりかねない。テキストがあって物事をしっかり頭の中で想像できることは重要だと思いました。
- また、知識が大切だということに関連して、本文で描かれているシーンをしっかりとイメージできること、そして、話の内容を、全体を通して理解できることというのも重要ではないかと思います。
- 翻訳には正しい答えがないということを理解しておくことも重要だと思います。（中略）クラス皆の訳を見ましたが、それぞれ表現が異なっていて、でも、文意は伝わってくるし、間違っているわけではない。むしろそれぞれにおもしろさがありました。だから、訳はある程度までは自由に表現できてそこがまた翻訳の面白さでもあると思います。
- （中略）それが今の自分にできているかと言うと、当然そんなことはないと思います。一番困ることは知識がないということです。（中略）やはり、文法とか、翻訳の技術を一生懸命覚えるよりかは、できるだけ多くのことを人生の中で、経験し、知識を得ること、また、その知識と、正しい文章の理解に基づいて話を一貫してイメージできるように訓練するのが今の自分にとって、必要なことだと思います。
- これから、僕はおそらく英語の勉強をずっと続けていくのだと思いますが、単に単語を単語帳を使って覚えるような勉強をするのではなく、経験に結びついた勉強の仕方を取り入れていけばいいのではないかと思います。また、日本語に翻訳することに関しては、日本語の表現力を今以上に豊富なものにさせる必要があるのは当然なことです。おそらく、多くの本を読む、たくさんの活字に触れるということはそのために必要なことだと思います。
- 理想の翻訳というものを考えるのであれば、それは、「原文を文法的に、または文脈的に正しく理解した上で、工夫を凝らして、自分が意図したような印象を読者に与えられる文を書く」ということではないかと思います。文法的、文脈的に、間違いがあってはその翻訳は確実に欠陥です。だから、そこができているという前提で、たとえば自分がこの文章を面白おかしく表現したいと思えば、その面白おかしさが読者にも伝われば、その翻訳は成功、理想的だといえます。（中略）また、思い切った訳が、「面白い」と思ってもらえるような勢いのある翻訳も僕の中での理想です。

学生 N（2 年、女性、英語学科国際コミュニケーション専攻）
- 翻訳をするにあたって大切だと思うことは、「読む」ことであると考える。これだけでは当たり前なようなことに聞こえるが、ただ「読む」のではなくて、その文章構成や文法、さらには文化や時代背景などを含めて「読む」のである。たとえば英語を日本語に訳す場合、その英語はどの国の英語であるのか、いつの時代に書かれたものであるのか、どのような地位や人種の人によって書かれたものなのか、などがその文章の内容と関わってくることが多いはずである。
- 翻訳をするのに、「語学力」が必要なのは当然

のことである。語彙や言い回しをもっと修得し、さらに「使い方」を理解することも大切である。今まで中学・高校と英語を勉強してくる上で教科書を使って英語の基礎を学んできた。しかし大学に入り、ネイティブの先生による授業を受けるなかで、「使って良い英語とあまり良くない英語」というのがあることがわかった。（中略）このことを聞いて、今まで習ってきたものと、実際に使われるものとのギャップを感じ、とても刺激を受けた。その先生は「文部省英語は時々危ない」という。このようなことを知らないと、翻訳をする上でも多くの語弊が生まれると思う。（中略）今まで習ってきた英語・文法にとらわれすぎずに、ある程度おおらかに、噛み砕いて訳すようにすることが必要である。また、ついつい若者コトバを使ってしまうことが多く、日本語の語彙も少ないと思うので、日本語のほうのスキルアップも必要である。

・ 今まで教科書やプリントなどの文章を訳す中で、とりあえず日本語にすることはできても、「この言葉、普段は絶対使わないなあ」と思ったり、英語における修飾をそのまま訳して「『の』とか『で』多いなあ」と思ったりすることがよくあった。しかし、受験や試験などにおける「この文章を日本語に直しなさい」。ではなく、「翻訳」をするようになった今、いかに文法に忠実であるかよりも、いかに読みやすく、内容が伝わるかが重要であると考える。

学生 O（2 年生、女性、英語学科異文化コミュニケーション専攻）

・ 訳文は原文の性質と同様であることが一番大切なことだと思う。
・ 翻訳において自分に必要なのは、まず語彙や表現力や読解力としての日本語力をつけることだと思う。（中略）それから想像力も必要だと思う。原文の直訳をさけるためには、読んだ原文の内容を一度頭に描いてみることが必要であり、その描いた内容の状態を把握してからだと原文にとらわれず、より自然な言葉で訳せると考えるからである。そのような日本語力や想像力を身につけるには読書が一番だと思うので、夏休みには本を読もうと思う。私は読書に時間がかかるので最近はあきらめていたが、今一番自分に必要だと感じているし、翻訳以外に勉強などにも役立つと思うので一石二鳥だと思う。
・ 理想的だと思う翻訳は、無理のない日本語で、訳文にありがちなぎこちなさがないものであり、文の運びがスムーズになっていると良いと思う。（中略）特にフィクションはそうであると理想的だと思う。堅い文章でも自然な表現で原文につられず日本語の言い回しをして、且つ内容を的確に伝えられるものが良いと思う。本の訳以外にも映画や歌詞の訳は要約された意訳で、同じ流れを作り出すものが良いと思う。

学生 P（2 年生、女性、英語学科国際コミュニケーション専攻）

・ 翻訳をするには大変な努力が必要ということが分かりました。
・ 翻訳にあたって大切に思うことは、読者が理解しやすい訳文を作ることです。幼稚な言葉を使うというのではなく、読者の頭にすらすら入り、情景が浮かんでくるような自然な日本語を作るということです。（中略）「そのことが私を喜ばせた」などのように、英文ではよく使われる文法でも、日本人にとっては馴染みのない文の形式が多用されているのも読者にとっては不自然で、理解しにくいのです。（中略）しかし、中には原作者が故意に、ややこしい言い回しを使っているということもあり得るので、その判断はとても難しいと思います。
・ 翻訳の為に、今の自分に必要なことは、様々な経験を積むことです。今まで私は殺人事件の起きるミステリーばかり読んできました。しかしそれでは、ファンタジーや童話、ホラーなど、あらゆるジャンルの本を訳す際に、その作品にぴったりの言葉の言い回しが思い浮かびません。そのため、日ごろから気にかけて色々なジャンルの本を読んでおくべきです。また、本のジャンルだけでなく、実際の生活の中での経験も必要です。例えば、工場員の主人公の物語を訳すことになった時に、もし自分がデスクワークしか経験がなければ、主人公がどんな労働環境で、どれほど体力的に大変で、どんな気持ちでいるのか分かりません。（中略）経験者に話を聞くことも可能ですが、自分が実際に経験したことがあった方がはるかにリアルな描写が出来るでしょう。したがって、比較的自由の時間が多いこの大学在学中に、自分の好き・嫌いにかかわらず、好奇心をもって、様々な経験をするようにすることが必要です。無駄な経験など何一つないと思います。
・ 私にとっての理想の翻訳とは、読者に「この本が外国人作家の本だなんて知らなかった」と思われる事です。それほど自然に読者の頭に入っていく描写をするには英語だけでなく、相当豊かな日本語が必要です。そのためには、様々な日本人作家の本をとにかくたくさん読み、上手な日本語の表現方法を盗み、色々な日本語を吸収しておくことが大切だと思います。

学生 Q（2 年生、女性、英語学科国際コミュニケーション専攻）

・ ただ文を訳せばいいというわけでないのが翻訳なのである。（中略）文章は生き物なのである。内容によってはナチュラルに説明文を加える必要がある。（中略）つまりまとめると、翻訳にあたって大切なのは、読み手の立場に立って言葉を選ぶことなのである。
・ そのためにまず今の自分に何が足りないのか考

えてみよう。それは知識なのである。言葉のレパートリーが豊富だと、それだけ表現方法も豊かになり、伝えやすくなる。そんな言葉の知識を身につけるには、新聞や本を読むことが大事だと思う。そして言葉の数を増やしたのなら、今度は翻訳の基本的なルールを知る必要がある。

・ いちばん最初の段階から完成品を作ろうとしたり、はじめからさらりと翻訳しようとしたりしてはいけない。まず全体の文に目を通す。そこから原文に忠実に言葉を足したり引いたりし、さらにその文章を客観的な目で読み返す。表現方法を変えても同じ意味で文に対して素直に訳せているか確認することも大事なのである。（中略）このような点にも注意を払いながら、文章と向き合うことで自分色の翻訳ができるのだと思う。

・ 理想の翻訳というのは、だれが、いつ・どこで読んでも意味が通じ理解できるものなのではないだろうか。翻訳によって意味のとらえ方も違ってくるため、少しニュアンスも変わってくるのはまれなことではない。しかしそれは言葉が生き物だからであり、どう育てるかで違いが生じるのだと思う。それもまた翻訳のいいところであり、大切にすべき部分ではないかと思う。

学生 R（2 年生、女性、外国語学部交流文化学科専攻）

・ 翻訳にはさまざまな種類があることを知った。私にとってはどれも同じ方法で訳すものだとばかり思っていたのでとても驚いた。（中略）その中で私が重要だと思った点はやはり、翻訳する前に頭の中でしっかりと内容を理解しておくことだ。いきなり冒頭から訳すのではなく自分の頭の中でストーリーを確実に入れておくべきだと感じた。そうしなければ筆者の意図する表現とは異なった文章が作成されてしまい、雑な文章となって意味の通る文章とは程遠いものになってしまう。私は「The Eyes Trump the Ears」〔注　筆者の訳書の一節〕を訳したときにその必要性を強く思った。一通り文章を読み込んだのであったが、完全に理解しきれていない文脈を見過ごしていたため自分が思ったように文を組み立てることができなかったのだ。そのため不完全な私の文は意味不明な点が読み手に多く指摘され〔注　学生間で訳文の批評をさせた〕、彼らを混乱させてしまった。自分の頭で文章の内容をつかみ、理解をした上で翻訳するという順序を守るべきだと感じた。

・ もう一つは、翻訳に対しての威力や集中力といった精神面も必要であるという点である。（中略）しかし先生の分厚くずっしりと重く、内容の濃い資料に目を通したときに翻訳に対しての熱意が感じられた〔注　ゲラや著者とのやり取り、調査資料などを参考に回覧した〕。限られた時間の中、莫大なページ数の本を一つ一つ訳していくことには相当な根性がなくては翻訳というものは成しえないであろう。私のようにすぐに力尽きてしまうのは翻訳においてはあってはならない行為だと課題や授業を通して実感させられた。著者のため、読者のために力を注ぐ気持ちがなくては翻訳はできないのだとこの授業から感じた。

・ 私にはまだまだ翻訳をするにあたって足りない部分がたくさんある。英語はある程度理解でき〔注　在外経験があると思われる〕、（中略）英語を読むことにおいてはさほど不便を感じることはない。だがそれを理解し、日本語へ文を訳し、文と文との相性が不自然ではなくうまく流れるように訓練する必要があるのだ。（中略）だからこそ、私の日本語力を伸ばしてもっと多岐にわたり表現をしてみたいのだ。そのためには今の私がやるべきことは一冊でも多く本を読むことだと思い、この授業をきっかけにこれから本を使って私には絶対に思いつかない言葉の言い回しを学ぶことが必要だと感じる。（中略）また、世界のあらゆる背景も学ぶべきだと考える。（中略）外国の方に日本の文化をうまく伝えられるかは翻訳者にかかってくるからこそ、世界の背景を知っておくべきなのだと考える。

・ 翻訳は英語の知識だけではなく、日本語力、表現力や感性も兼ね備えるとてつもなく奥が深いものである。文章は練り続ければ練り続けるほど読み応えがあるまとまったものができる。正しい翻訳など存在することがなく、同じ文章であっても人それぞれ異なってくるからこそ、翻訳は自分の力を存分に発揮できるから面白い。さらに翻訳を通して日本以外の国の特徴を学ぶことができるのは素晴らしいことだと思う。

・ しかし私の文章は多くの人には指示〔注　支持〕されず、理想の翻訳にはまだまだ及ばないが、以前課題を訳し、クラスで投票結果を聞いたときに〔注　一番好きな訳文を無記名で選ばせた〕たった一人でも自分の翻訳がいいと思った人がいた。私はそれだけでもうれしく思い、それは胸を張れることなのではないかと考えた。まだ翻訳に触れて間もない私の雑な翻訳でも支持してくれた人がいるのは、これから翻訳の勉強をするうえで大きな糧となるだろう。

3. 目標としたこと

翻訳クラスの受講にあたっては、TOEIC 600 点以上もしくは TOEFL (iBT) 54 点以上、(PBT) 480 点以上、(CBT) 157 点以上が履修条件であったことから、英語については全員が中級もしくはそれ以上の力を備え、過半数が翻訳を学ぶのは初めてだった。また、獨協大学では充実した英語学習のカリキュラムが組まれ、英語学科の学生をはじめとして受講生は日ごろから英文訳読方式の基礎力を鍛えられている。そこでこのクラスでは、翻訳の土台となる心構えを身につけてもらうことを目指した。言い換えれば、英語教育を通じて学んできた「こういう単語・表現・

構文はこういう日本語に置き換える」式の自動的な発想を改め、メタ言語の視点から自分の責任において訳語を考え、訳文を作るという認識を得てもらうことを、第一目標とした。

時間の関係ですべてをカバーすることには限界があったが、具体的には以下のような点を取り上げたいと考えた。

- 翻訳は読み取った内容を咀嚼し、自分の言葉で表す作業であることを認識させる。（I am a cat は「私は猫です」、「我輩は猫である」、「ネコなの、あたし」などになる。）
- 文の意味は文脈の中で考える、また部分にとらわれずに全体を把握して訳文を考える意識を持たせる。
- 原文の目的、ジャンルや対象読者に応じて訳語の選択や表現が変わってくることを認識させる。
- 英文は精読しなければ、漠然とした理解では訳せないことを認識させる。
- 訳文には全面的に責任を負う必要があること、分からないところは徹底的に調べるのが基本であることを認識させる。
- 自分の価値観をあてはめることの危険性を認識させる。（太陽に赤でなく白をイメージする国もある、リンゴは赤いと考えていない文化では、「リンゴのような頬」はふっくらした頬を表すかもしれない、など）
- 言葉には文化の背景があること、一対一で意味が対応するとは限らない（辞書は絶対ではない）ことを認識させる。
- 英語では厳密に表現される情報（時制や前置詞が伝える場所・空間の概念、動きの種類、単数・複数、冠詞の使い分け、など）には、日本語にはそぐわない場合があることを認識させる。（逆に、和文英訳の場合には日本語では曖昧な部分を厳密に表現することが必要になる。）

4. 授業の概要

最初に言語の成り立ちそのものを考えるための大きな枠組みを示し、次いで短文から始めて徐々に長い文章を使いながら、演習や宿題を通じて実践的に翻訳に取り組ませた。授業では持ち帰って読むための参考プリントや補足説明を随時配布し、2 回に 1 回の割合で宿題やレポート提出を課した。宿題の訳文は適宜添削をし、クラスの全員にコピーを配布して無記名で批評を書かせるなど、自分の書いた文章を客観的に見直すことができるようにした。

全 14 回の授業は、概ね以下の構成とした。

第 1 回　オリエンテーション

Let's sit in a chair と言われて椅子に腰掛けた図を何人かに黒板に描いてもらい、英文が伝えている情報を把握するためには精読が必要（肘掛けを描いた学生は一人もいなかった）、英語には必ずしも日本語訳には反映されない厳密な空間意識があるなど、翻訳は訳語を当てはめていくだけの作業ではないことについて、翻訳クラスで取り上げる概要を説明。

第 2 回　文化と価値観

お花見の写真を見て日本人と外国人ではどのように捉え方が異なるか（ジョン・コンドンの『異文化コミュニケーション』より）などの具体例を交えながら、エドワード・ホールのロー・コンテクストとハイ・コンテクスト文化の概念や、文化圏に応じて時制や空間概念とそれに対応する言葉が異なることなどを解説、メタ言語の視点を獲得してもらうための講義を行う。

第 3 回　コンテクスト

文脈における意味、表現の問題を考える。また Time flies like an arrow （光陰矢のごとし）や「黒い目のきれいな女の子」などの曖昧性を取り上げる。

第 4 回　演習

I am a cat.（私は猫です、我輩は猫である、ネコなの、あたし）など、短文を自分の言葉で翻訳する。

第 5 回　言葉と意味のずれ

辞書の限界を認識し、厳密に言葉を選んで訳す、辞書になければ自分で訳語を考えることなどについて、演習を行う。

第 6 回　調査、確認

訳文には全面的に責任を持つ必要を認識させ、単位の換算や訳語の選択などにグーグルを使いこなすためのテクニックを指導。

第 7 回　英文添削

短い英文の中にも膨大な情報が含まれていることを理解するために、すっきりした英文を書くための英文ライティングの考え方を講義。なぜ英文ではそのような表現になるのかを認識させる。

第 8 回　翻訳演習（ノンフィクション・一般向け）

筆者の進行中の訳書から翻訳を演習。受身や主語など、日本語と英語の違いも考察。

第 9 回　翻訳演習（フィクション・いろいろな訳し方）
『不思議の国のアリス』のさまざまな邦訳を読み比べ、原著の一段落を翻訳する。無生物主語の訳し方なども解説。

第 10 回　翻訳演習（第 9 回の続き）
形容詞、副詞の訳し方や話法の訳し方なども取り上げる。

第 11 回　翻訳演習（フィクション・英文から日本語の原文を探る翻訳）
川端康成『山の音』のサイデンステッカー訳をもとに翻訳演習。日本語の力を見直してもらう。

第 12 回　翻訳演習（ノンフィクション・学術系）
既刊の訳書（『ヨーロッパの祝祭日の謎を解く』）の翻訳演習。フィクションとの違いを学んでもらう。

第 13 回　翻訳演習（実用文）
取扱説明書を正確に訳す演習を行う。

第 14 回　翻訳演習
翻訳にあたり注意すべき点その他の復習。

5.　翻訳クラスの省察

簡単な英文については質の高い柔軟な翻訳をするようになった学生もあった。構文は理解できてもそれを表現するための日本語の力が不足している学生が多かったことから、日本語を磨くことによって翻訳の力も格段に向上すると思われる。

原文が伝える内容を逸脱しない限り自由に言葉を選んでもいいという安心感があったためか、はっとさせられるような斬新な表現もたくさん出てきた。このクラスでは時間的にその余裕がなかったが、今後は綿密に論理を読み解いて訳す必要のある英文などにもしっかり時間をかけて取り組めば、自由度の高い翻訳と厳密な翻訳の違いを体得し、もう少しバランスのとれた翻訳ができるようになるのではないかと思う。

翻訳をするとはどういうことなのか、大まかな輪郭をつかんでもらうために、広範囲にわたる内容を詰め込んだ駆け足の授業になったが、これは反省すべき点でもある。翻訳作業に丁寧に取り組む時間が少なすぎたため、さまざまなケースに対応できる翻訳の力をつけるためには、理論や理屈を離れてまだまだ実践を重ねる必要があるだろう。

どれほど翻訳について学んでも、訳文を作ることができなければ意味がない。卵が先かニワトリが先かのジレンマだが、翻訳は甘くない、それでも楽しいと学生たちに考えてもらうことができたとすれば、それは彼らが言語（この場合は英語）が好きで、それに情熱を注いでいるが故の自然な反応だろうと思う。その気持ちがこれから翻訳を極めていく上での礎になってくれることを期待したい。

蛇足になるが、レポートで寄せられたもっと経験を積む、たくさん本を読む、文は生き物、原著者が日本語で書くように訳す、幼稚にならずに読者に伝わるように、など、意見や感想のほとんどは学生たちが自分で考え出したものである。教師が先導してそこへ向かわせるのではなく、「こういう翻訳を目指したい」と自分で理想を定め、自ら意欲を湧かせて今後の翻訳に取り組んでもらいたいと考えたのだが、まるで「翻訳通信」を参考にしたのではないかと思わせるような、原点に立ち返った発想に感心させられた。

RH ブックス・プラス
（武田ランダムハウスジャパン）

日本経済新聞出版社広告
『国富論』
（約 650KB）